

伊豆伊東のゴルフ物語

【はじめに】 いい温泉とゴルフ

静岡県の伊東市は人口約7万人、伊豆半島東側の本州との付け根に位置していて、豊富な湯量を誇る温泉リゾート地である。東京に住む我々から眺めると東京の奥座敷というイメージだ。温泉といえはかつては“貫一、お宮”の熱海が浮かび上がっていたが、JR伊東線の発展によって、その奥の伊東に眼が向くようになった。

その伊東を一口で表現すると、訪ねてよし、泊まってよし、食べてよし、と三拍子揃ったリゾート地という印象だ。

東京から足を運ぶとなれば伊東はJR東海道線の熱海を経由して100キロ余りの至近距離に位置する。東海道線だけでなく、新幹線も利用できるし、東京駅からだと伊東線直通の特急もある。最近は関東北部の高崎からの直通電車も走っている。

《東洋一を誇るリゾートホテルとゴルフコース》

この伊東には古くから東洋一といわれたリゾートホテルがあり、36ホールの名コースもある。戦後には伊東市を中心に多くのゴルフコースが建設され、大勢のゴルファーが訪れるようになり、日本のゴルフは伊東で育てられた一面もある。

多くのアマチュアゴルファーが育ち、プロも育った。日本の伝統競技や国際競技の舞台にもなったからだ。

明治22年創業の老舗ホテル『暖香園』の6代目社長の北岡貴人氏（82）は、幼少期からゴルフに親しみ学生時代には関東学生ゴルフ選手権に優勝した名ゴルファーだ。その北岡氏は『日本のゴルフは100年の歴史を刻んだ。ここ伊東を舞台にして多くのゴルファーも育てている。伊東にまつわるゴルフ史とこれにかけた先人の苦闘を後世に残したい』という発想を踏み台に『伊豆・伊東のゴルフ物語』の連載を進めることにした。

《写真》

JR伊東駅の表情と暖香園の玄関



伊豆伊東のゴルフ物語

(1) 東京と奥座敷（伊東）を結ぶ 東海道線と伊東線

伊豆・伊東の町が温泉で有名になった歴史は古く、明治時代以前のような。温泉が湧いたのはもっと古い時代らしい。明治時代に入って数軒の旅館ができ、やがて漁業と温泉の町として知られるようになり政界、財界のお歴々がここを訪ねるようになった。

このように温泉の町として知られるようになったきっかけについて『伊東温泉協同組合誌』の中で、同組合相談役だった村上延雄氏は、こう述べている。

『道路1本、橋一つでこんなに町の様相が変わるものか』

その代表的な実例として旧国鉄伊東線の開通に触れている。いまの伊東温泉の繁栄のきっかけは、熱海～伊東を結ぶ16.9キロの伊東線の開通に寄るところ大と強調している。

なるほどJRは東京駅から頻繁に直通電車を運行しているので、座席さえ確保できればのんびりとリラックスして車窓から飛び込んでくる東海道沿線の景色の美しさを楽しめ、2時間余りで到着するから“伊東が東京の奥座敷”という近親感を抱かれるのは当然だろう。

東海道沿線の各駅から流れてくる発車ベルは、それ急げ！といった、けたたましいベルに代わって耳障りのいいオルゴールの音色になっている。JR伊東駅の発車合図は『ミカンの花咲く丘』（海沼實作曲）のように郷愁をさそう童謡が流れる。小田原は『お猿のかごや』（同）だ。オルゴールの発車合図で印象に残るのは営団地下鉄の銀座駅だ。曲は『銀座カンカン娘』（高峰秀子）である。これも旅の楽しみ。

『東海道線が御殿場回りの時代は、国府津から伊東までは船便だった』（北岡貴人氏）そうで、まさに隔世の感がある。

《写真》

(上) 伊東港の風景

(下) 明治時代の暖香園のある日、ある時の景色～ちょんまげ姿が面白い
伊東温泉協同組合誌から



伊豆伊東のゴルフ物語

(2) 暖香園とゴルフ

伊東の老舗ホテル『暖香園』（伊東市竹の内1-3-6）は明治22年の創業で、社長の北岡貴人氏（82）は6代目になる。先代の丈人氏（1914～1985）は大学時代を東京で過ごし、社会人になって体調を崩した。健康維持のためにゴルフを勧められてクラブを振り出した。ここに暖香園と伊豆・伊東のゴルフとの接点がある。

丈人氏はお若い時代に千葉県得我孫子ゴルフ倶楽部に入会してゴルフ熱中時代を迎えた。このゴルフ場には川奈出身の山本増二郎が専属プロとして勤務していたので、技術指導を受けながら交流が始まる。

我孫子GCは昭和5年の開場で名ゴルファー赤星六郎の設計で知られる。関東では東京ゴルフ倶楽部、程ヶ谷カントリー倶楽部、霞ヶ関カンツリー倶楽部、相模カンツリー倶楽部などに並ぶ名門ゴルフ場といわれ、戦前から数多くのアマ、プロ競技の舞台になっている。

昭和初期に入ると川奈には東洋一豪華な川奈ホテルが誕生した。それに付随した大島、富士の両コースが完成してゴルファーの注目を集めた。訪れるゴルファーが急増した裏には、ゴルフ好きの丈人氏のゴルフ人脈が生きていた。

だが戦後はホテルの全施設は連合国軍に接收され、豪州軍の施設になったが、接收解除を迎え、以前同様に日本人ゴルファーの手に戻った。戦時中、活動を休止していた関東プロゴルフ協会は在日米軍の協力を得て復活し、以前のように競技会を開催した。川奈のリンクスはその舞台になり、競技に出るプロたちが暖香園を訪れた。この時、丈人氏は自分が楽しんだ我孫子GCのプロのみならず、訪れるプロたちを歓待した。

関東プロゴルフ協会の競技は36ホールの月例で例年、早春の川奈が舞台になったが、今日のプロと違い、当時のプロたちは薄給の身で、遠征費の捻出に苦労していた。

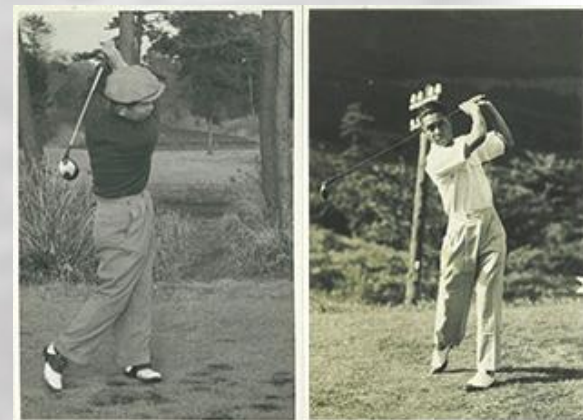
『若い頃、伊東（暖香園）では随分とお世話になったよ』と林由郎（我孫子）はよく口にしていた。丈人氏のゴルフ好きの親心だったろう。

《写真》

（上）若槻礼次郎書による暖香園の文字

（中）同ホテルのフロントに飾られている。我孫子GCのプロだった山本増二郎と林由郎

（下）暖香園先代社長の北岡丈人氏



伊豆伊東のゴルフ物語

(3) 日本のゴルフとゴルフ場

日本のゴルフは100年を超える長い歴史を刻んだが、近代ゴルフが初めて日本の地に根をおろしたのは1901（明治34）年だった。神戸在住の英国人で貿易商のアーサー・H・グルームが神戸・六甲山上の別荘の庭に4ホールの私的なコースを造った。コースを造ったグルームは1846年、ロンドンで生まれ、1868（明治元）年に長崎にあったグラバー商会の一員として来日している。また六甲の開祖としても知られた人物だ。長崎を経由して神戸に住むようになったといわれるが、商売はお茶を扱っていたそう。グラバー商会（トーマス・グラバー）といえば、三菱とは縁の深い貿易商社である。

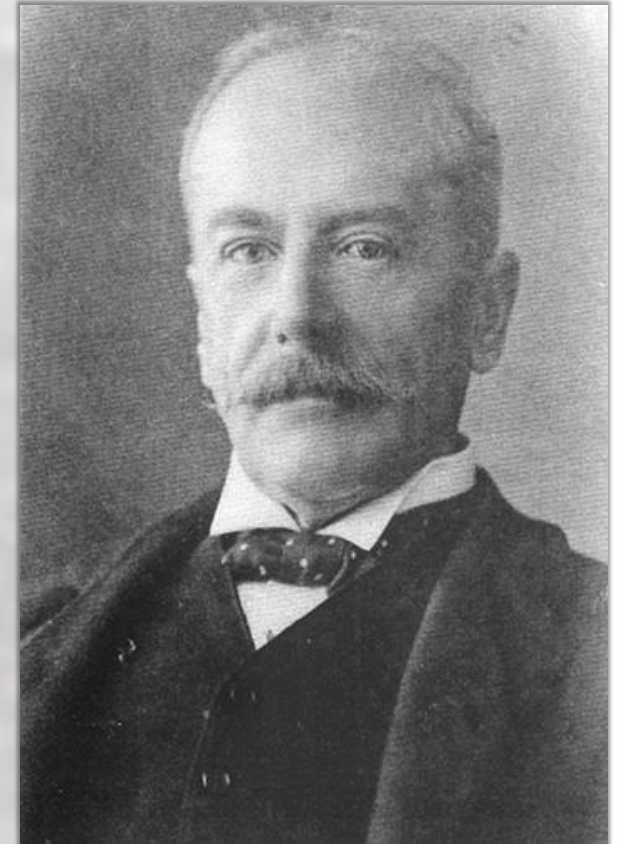
外国との貿易の窓口になっていた長崎の雲仙には外国人のためのゴルフコースがあった。横浜の根岸（根岸の競馬場）にもあった。

しかしゴルフ場が建設されても日本では舶来スポーツというだけのことで普及には至らず日本人のゴルファーが育ったという話は聞かない。

日本人のための最初のゴルフ場は1913（大正2）年創設の東京ゴルフ倶楽部（現在は埼玉県の狭山市にある）だ。創設者は日銀に勤務し、後に大蔵大臣を歴任した井上準之助（1869～1932）である。井上は日銀時代にニューヨーク支店に勤務していたが、群馬県出身の生糸商だった新井領一郎に巡り会い、ゴルフの面白さを説かれたのがきっかけで『中年を過ぎたビジネスマンにとって最良のスポーツ』と熱中した。帰国後、ゴルフ場造りに奔走して、樺山愛輔、荒川新十郎というよき協力を得て東京・駒沢に会員制の倶楽部を創設した。これが日本のゴルフの夜明け。創立は1913（大正2）年12月8日のことだった。

《写真》

アーサー・H・グルーム



伊豆伊東のゴルフ物語

(4) 日本人が創ったゴルフ場の出資者は、経済界牽引の大物ぞろい

日銀の井上準之助は、ニューヨークでの勤務を終え、帰国したのは1912（明治45）年だが、日銀には戻らず横浜正金銀行の副頭取に就任した。その間は時間的にゆとりがあったらしく、滞米中に親しんだゴルフが忘れられず根岸のゴルフ場（NRCGA）を再三訪れている。ここで社交団体である東京倶楽部の会員との交流が始まった。井上と同郷の荒川新十郎（横浜生糸社長）の紹介によるものだった。東京倶楽部とは当時、東京・虎ノ門に本拠を置く政財界の名士が集う社交団体。1884（明治17）年の創立である。

その頃の日本は欧米との不平等条約の改正という重要な国際問題に直面していた。そんな矢先に英国を範としたジェントルマンクラブとして創立され、国際交際親善の推進、会員相互の親睦と知識の交流を目的に掲げていて、日本の国際化の推進役を果たしている。

さて、井上は東京ゴルフ倶楽部設立の動きの発端を担っていたが、ゴルフ倶楽部の設立資金提供者と会員構成は東京倶楽部のメンバーが中心だった。会員の中には駐日英米両大使を始め外国人が多かったので、倶楽部の定款、年次報告、会員名簿はすべて英文で表記されていた。

ゴルフ場建設のために井上はまず、出資団体である東京ゴルフ会を立ち上げ、明治時代の終わりから大正の初めにかけて第1回目の出資者を募った。出資金は101000円。井上以下30人の応募があり、その後追加して出資者を募ったところ、17人の応募があった。当時の金額1000円といえば今日なら1億円相当だろうか。主な出資者は岩崎小弥太、今村繁三、森村開作、大倉和親、樺山愛輔、村井貞之助、大倉喜七郎、高木喜寛、三井八郎右衛門らで、日本の経済界を代表する大物ぞろいだった。

《写真》

TGCのコースと主な出資者～樺山愛輔ほか



伊豆伊東のゴルフ物語

(5) 日本のゴルフコースの建設

井上準之助のゴルフ場造りは、まず広大な土地探しに始まった。倶楽部の発足は1913（大正2）年だが、その後にコース建設という大きな関門が横たわっていた。日本ではすでに神戸、根岸、雲仙、鳴尾などに外国人のコースはあった。井上は倶楽部の財政面のみならず、コースの土地探し、建設に至るまで孤軍奮闘した。

土地探しの末、東京の郊外に格好の土地を見つけた。東京市荏原郡駒沢村（現在の東京都世田谷区）に3万余坪の空き地があった。地主の代表格は古くからこの土地の所有者で、秋山紋兵衛、三田弥兵衛の両家だった。ほかにも多くの地主がいた。

早速、井上は借地交渉に入り、借主との契約調印の場を銀行の一室を希望した。だが地主たちは承知しなかった。

『3万坪もの広い土地を個人で借りるというのは信用できない。ペテン師かも。銀行の頭取とはいえ・・・』という疑問を抱いた。果たしてどんな家に住んでいる人物かを知りたかったらしい。横浜正金銀行の本店事務所を交渉場所にしたが、地主たちは承知しなかったので、井上の自宅（東京・麻布三河台）に落ち着いた。井上邸は門構えが大名屋敷のような大きい大邸宅だったので土地を貸す方は安心したらしい。

かくして借地の契約が締結したのは1914（大正3）年の初め。ほどなくして建設の鍬入れ式が行われて日本人の日本人の手によるゴルフ倶楽部のコースが産声を上げるが、当時はゴルフ場建設の知識もなく、暗中模索の状態の中から建設の工事が進められたという。しかし、根岸のゴルフ場に、コースに関する知識を持った会員がいたので、その知識を借りた。ブレディとコルチェスターという両氏がコース設計を引き受けた。同年6月、駒沢に6ホールのコースが完成した。



《写真》

完成した東京GCの駒沢コースと芝刈りを馬が引っ張っていた

伊豆伊東のゴルフ物語

(6) 林愛作のゴルフとゴルフ場

群馬県出身の林愛作（1873～1951）は明治の初期、19歳の若さで単身アメリカに渡り、東海岸の大学で学び、卒業後は大阪に本拠を置く美術商の山中商会ニューヨーク支店に勤務していた。

その時代の日本の国情は鎖国政策から脱却して近代化に流れていた。明治から大正へ。多くの外国人が日本を訪れるようになり、日本経済界の牽引役を担っていた渋沢栄一（1840～1931）は、経済の発展を見据え、西洋式のホテルの建設を目論んでいた。

当時の日本には西洋式のホテルはなく、旅籠では外国人の受け入れは難しかった。そこでアメリカにいる林の人脈に目をつけ、西洋式ホテルの建設協力を打診した。林は滞米生活も長く、友人に建築設計家のフランク・ロイド・ライトがいて、ライトの起用を条件に渋沢の要請を受けた。かくして東京・日比谷に西洋式の帝国ホテルが誕生し、林はその支配人に就任した。

ところがこの林について日本のゴルフ界はその存在を見落としていた。林は滞米中の大学時代にゴルフを知り、プレーの経験者だった。

1919（大正8）年、同人雑誌にこう書き残している。

『ゴルフ遊戯は健康に適し、これをやれば20年は長生きする。1899（明治32）年、学校でゴルフをやった時分、日本人でゴルフをやるものはまだ、いなかった』

林は帰国してゴルフ場造りを思い立ち、土地探しと同好の士を求めたが、日本はゴルフ無縁の時代だった。やむを得ず自身でこの地（現在の東京・駒沢）にコースまがいのものを造りボールを打ったと伝えられる。井上準之助が、コース造りに土地探しをして東京ゴルフ倶楽部を創設したが、奇しくも林が当初目をつけた土地と同じ場所で現在は東京オリンピック記念公園になっている。東京都民のオアシスで、その一角にライトが林に贈った別荘（八星苑）が、いまに残る。

《写真》

在りし日の林愛作と八星苑





(7) 日本のゴルフの先駆者、 新井領一郎のゴルフ

日本のゴルフ史に登場する新井領一郎（1855～1939）は、生糸商として生涯をアメリカで過ごしたゴルフ愛好家だった。明治から大正の時代にかけてニューヨークを訪れる多くの日本人に、ゴルフの面白さを説き、ゴルフを広めた日本のゴルフの元祖ともいえる人物だった。その領一郎はいまから163年前の1855（安政2）年8月、群馬県で養蚕業を営む星野家に生まれ、幼少期に新井家の養子に迎えられた。

星野家の長兄、長太郎から生糸の輸出の話を持ちかけられ、海外貿易を志してアメリカに渡った。

1876（明治9）年春、領一郎は6人の若者とともに生糸の見本を携え、オセアニア号でアメリカに向かった。佐藤百太郎以下伊達忠七、増田林蔵、鈴木東一郎、森村豊それに新井領一郎らの計6人。

新井はニューヨークに本拠を置き、得意の英語を駆使して生糸の売り込みに汗を流した結果、業績は順調に伸びた。1884（明治17）年には、牛場家の田鶴と結ばれて新しい生活が始まった。

だが、激務のあおりで1900（明治33）年を過ぎた頃から体調を崩し、療養を余儀なくされた。だが、これがきっかけでゴルフの虜になった。

孫のハル・ライシャワーは著書の『絹と武士』にこう書いている。

領一郎は1902（明治35）年頃、療養のためノースカロライナ州のパインハーストに滞在した。ここで健康維持の目的でゴルフを始めた。折柄、アメリカではゴルフが普及し始めたところだった。健康を取り戻し、ニューヨークに戻っても領一郎のゴルフは続いた。ニューヨークの日本人の社交クラブである日本倶楽部（1905年創立）ではアメリカを訪れて来る後輩たちにゴルフを勧めていた。日銀の井上準之助は新井に説得された一人だった。

《写真》

絹と武士。著者はハル・ライシャワーで、新井領一郎の孫になる

絹と武士

ハル・松方・ライシャワー
広中和歌子 訳

*SAMURAI
and SILK*

A Japanese and American Heritage



Haru Matsukata Reischauer

文藝春秋

伊豆伊東のゴルフ物語

(8) ゴルフの元祖、新井領一郎の帰国

生糸商として長くアメリカに滞在していた新井領一郎は1935（昭和10）年に帰国して、旧友とゴルフを楽しんだ。足を運んだ先は会員になっている東京ゴルフ倶楽部の朝霞コース。このコースは1932（昭和7）年5月に開場したチャールズ・アリソンの力作だった。世界に通用するコースを目指して完成させたが、1940（昭和15）年、旧陸軍省から予科士官学校に転用のため用地が買い上げられて姿を消した。現在、跡地は陸上自衛隊の駐屯地になっている。

宿無しになった東京ゴルフ倶楽部は、当時36ホールを有する埼玉県入間郡にあった秩父カントリー倶楽部（旧名は新霞ヶ関CC）と合併して新生の東京ゴルフ倶楽部となって今日に至っている。

帰国した領一郎は旧友の田中実（軽井沢GC創設の中心人物）、地主延之助（横浜生糸社長）と朝霞のコースをプレーしたのは1935（昭和10）年の4月11日。81歳の領一郎は元気に18ホールを歩き、パー3のホールではパーを取って元気なところを見せた。プレー後『若い頃はテニスをやったが、ゴルフが一番いい。仲間ができる喜びがある』とゴルフ礼賛をひとくさり。

かつて後輩の村井保固（貿易商の森村組ニューヨーク支店）にゴルフを勧めた際のことなエピソードが残る。

領一郎のしつこい勧誘に業を煮やした村井は憚然として『ボールの前にひざまずいて頭を下げたら打ってやる！』に、領一郎は地面に頭をこすりつけて説得した。村井はその後、領一郎に劣らぬゴルフマニアになった。1939（昭和14）年4月、領一郎は84歳の生涯を閉じた。

《写真》

1935年に帰国して旧友とゴルフを楽しんだ新井（中央）と右は田中実、左は地主延之助



伊豆伊東のゴルフ物語

(9) 日本人の第1号ゴルファー

日本人でだれが一番早くゴルフを始めたのだろうか？いささかクイズめいた話だが、よく話題にもなる。ビジネスマン？それともお医者さん？だろうか。答えは意外や意外。旧海軍士官だった。

その海軍士官の名前は水谷叔彦(よしひこ)(1865～1947)。海軍退役時は機関少将のエンジニアだった。水谷は舞鶴の海軍機関学校を卒業して1893(明治26)年、イギリスのグリニッチにある海軍大学に留学した。留学中の生活はこまめに日誌に認(した)めているが、この日誌が水谷の実家で見つかった、と精密機器メーカーの社長をしていた明石和彦氏が公開してくれた。水谷日誌は僅か1行ながら、18ゴルフをやったと書かれている。これぞ日本のゴルフ史の上、貴重な記録といえる。

横書きのペン文字で、1896(明治29)年1月1日のページに『午前、golfin gを為す』とある。日付も明確で、明石氏は『祖父は日頃、日本人の中では私が最初にゴルフをやった』と家人に語っていたそうで、これを裏付けている。

水谷が日本人の最初のゴルファーであることを発見したのは下村宏(1875～1957)で、政治家、ジャーナリスト、歌人、ゴルフ愛好家として知られる。終戦時は鈴木内閣の情報局総裁。終戦の玉音放送に関わった。

ゴルフは程ヶ谷CCの会員で役員を歴任している。多彩な才能の持ち主らしく海南という号を持っていた。

水谷は、惜しむらくは軍人という立場上、ゴルフを普及させようとした言動はなく、あくまでも個人的はスポーツに終わっている。しかし海軍を退役後、北海道・室蘭の製鉄所の役員を歴任し、室蘭イタンキコースの開設に助言をしている。明治、大正時の富国強兵の意外なる副産物だった。

《写真》

(上) 東京GCをプレーする水谷さん～右端

(下) 日誌の一ページ





(10) 日本のゴルフ躍進と JGAの創設

1913（大正2）年、日本人の手による日本人のゴルフ倶楽部が誕生して、日本のゴルフは夜明けを迎えた。時は明治時代から大正時代へと移り、西洋から持ち込まれたスポーツの愛好者が増えた。

東京ゴルフ倶楽部の会員たちは他倶楽部との対抗マッチに目を向け、横浜や神戸にあった外国人の倶楽部を相手に腕を競った。ところがゴルフにはきめ細かい競技規則があり、当時は外国人だけの英文規則のみで日本人は理解しにくかった。このため対抗戦で反則行為とみなされて、勝てる勝負を落とし悔しい思いをしている。そこで先達は日本のルールを求めて、ゴルフ界の組織化を図った。

イギリスでゴルフを履修した大谷光明（1885～1961、浄土真宗西本願寺・光尊三男）は1924（大正13）年、東京ゴルフ倶楽部（駒沢）で開催された日本アマチュア選手権（在日外国人の手で開かれていた）の折、参加した東西7倶楽部の代表たちに日本のゴルフを統括する競技団体の創設を呼びかけた。創設案は決議されて定款、規約、細則、委員の選任や競技会開催などが決まった。当時、在日外国人の手で行われていた日本選手権は今日の日本アマチュア選手権の前身で、優勝カップは当時のものが引き継がれている。

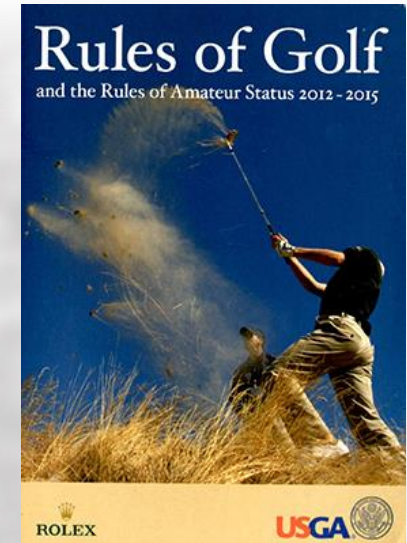
発足した日本ゴルフ協会（当時は英文表記でジャパングルフアソシエーション＝JGA）は1934（昭和9）年からゴルフ規則の邦文化に取り組み、大谷光明を柱に邦文起草委員会を立ち上げた。邦文化された規則は翌10年から実施され、同時にJGAにルール委員会が発足している。

公益法人である今日のJGAは、ナショナルフェデレーション（NF）として我が国のゴルフ界を代表する機関であり、競技規則制定や国際交流などの事業を手掛けている。

《写真》

（上）JGA発行の規則書（昭和9年に邦文化された）

（下）日本アマチュア選手権トロフィー（JGA70年史より）



伊豆伊東のゴルフ物語

(11) 在日外人の日本選手権から、日本人の選手権へ、だが・・・

日本ゴルフ協会（JGA）は1924（大正13）年に産声を挙げ、主な事業はゴルフ規則の制定と競技会の開催としている。その事業の一つに日本のナショナル選手権の開催があるが、その前身は、神戸ゴルフ倶楽部と横浜・根岸のニッポンレスクラブ・ゴルフイングアソシエーションとの対抗戦であった。1907（明治40）のこと。両倶楽部の代表たちの発案で、対抗戦を日本選手権にしようということになり、第1回の日本選手権開催（神戸）の運びとなった。だが、日本選手権といっても初期の段階では日本人の参加はなく、外国人のみの大会だった。

日本人初の参加者は1916（大正5）年の一色虎児（東京ゴルフ倶楽部会員）。一色はアメリカでゴルフを覚えた一人だが、その後、海外でゴルフを履修した川崎肇といったビジネスマンたちが帰国して競技に参加するようになり、権威あるナショナルチャンピオンシップになった。

外国人時代の競技は36ホールのストロークプレーで争われていたが、JGA創立後にマッチプレーが採用され、勝ち抜き戦でチャンピオンの座を競った。だが、1967（昭和42）年に競技方法はストロークプレーになり、2000（平成12）年にマッチプレーが復活と思ったら2016（平成28）年にまたストロークプレーに戻った。競技方法は猫の目のような変わりようだ。

かつて選手権の出場者たちはアマチュアリズムを遵守し、作法に厳しく、ルールに厳格でゴルファーの範となるような人物が多かったが、いまは中高生、学生の大会という印象は否めない。社会人の参加は日程、費用などの事情で年々減少傾向で、極論すれば、プロの予備校という感じが強い、と寂しい思いのオールドタイマーが多い。

《写真》

（上）日本人として草創期の日本アマ選手権で活躍した川崎肇

（下）日本人として初出場した一色虎児



伊豆伊東のゴルフ物語

(12) 女流ゴルファーの草分け 帰国後ゴルフ場の近くに居を 構える熱中ぶり

日本にゴルフが伝わって来て100年を越える歳月が流れた。いまや欧米を凌ぐほどの発展を遂げている。しかし、一時期の熱狂ぶりは影をひそめ、若い世代のゴルフ人口は減少状態にあるようだが、今日の日本のゴルフ界では、熟年の女性ゴルファーたちが一番元気がいい。

日本における女性ゴルファーの先駆けは三井栄子（1895～1977）である。同夫人は岸和田旧藩主ゆかりの方で、三井弁蔵（三井物産元役員）と結婚後、ニューヨークに滞在した。その間、夫人は女子学習院時代から親しんだテニスに熱中したが、親戚に当たる新井領一郎から『テニスは歳をとると難儀になるから・・・』とゴルフを勧められて転向し、ゴルフを生涯の友とした。大正の末期に夫妻は帰国したが、その時代には今日のようにゴルフ場はなく、数年前に創設された東京ゴルフ倶楽部に入会した。住居もゴルフ場の近くということで、現在の東京・世田谷区深沢に居を構えて滞米時代に覚えたゴルフに汗を流した。

三井夫人は旧子爵の家庭に育ち、絶世の美人との誉れが高く、筆もたつし、歌も詠む。すべてを兼ね備えた才女といわれ、日本を代表する女流ゴルファーの至宝、象徴ともいうにふさわしい人物だった。

この時代のゴルフは男性だけのもので、女性には縁遠かった。だが三井夫人は戦前、戦後を通じて日本の女子ゴルフの牽引役を担い、普及には並々ならぬ情熱を傾けた。

競技者としては1926（大正15）年から1937（昭和12）年に至る12年間、関東・関西の婦人対抗戦で大活躍した。いまの熟年世代の女子ゴルファーには三井流の血が流れているのだろうか。

《写真》

（上）初期の婦人東西対抗の集合写真

（下）三井夫人のショット



伊豆伊東のゴルフ物語

(13) アマ・プロゴルファーによる 東西対抗（アマチュア）

かつて日本の男子ゴルフ界にはアマ、プロ、学生による東西対抗という競技があった。静岡を中心点として東西を二分した地域の対抗戦で、その結果は毎年、日本のゴルフ界に新鮮な話題を提供していた。特筆すべきは、東西いずれかの代表に選ばれることは、ゴルファーとしては最高に荣誉なことで、一流の証ともいわれた。

アマチュア男子の対抗戦は1927（昭和2）年の創始でJGAの根幹競技だった。英米のアマチュアによる対抗戦ウォーカーカップを範として誕生し、勝利チームには三宮殿下（朝香、東久邇、李王垠殿下）下賜の金色に輝くトロフィーが与えられていた。

競技は午前ダブルス戦の18ホールマッチプレー。午後はシングルス18ホールマッチプレーで争われ、勝者には1ポイント。引き分けは0・5ポイントが与えられた。敗者は0。ポイントの合計で雌雄を決していた。

第1回の東西対抗は1927（昭和2）年、大阪の茨木CCで行われ、JGA創立の中心人物だった大谷光明をキャプテンとする東軍が11対4の得点で圧勝している。

東軍は大谷光明を中心に赤星四郎、六郎の兄弟、川崎肇、西洋芝を開発した相馬孟胤、野村駿吉らが主力メンバーだった。西軍は高畑誠一、室谷籐七に在日外国人ゴルファーでチームを固めていたが、日本のゴルフ界の新しい力として躍進しつつあった東軍に一蹴された。

この男子アマチュアによる東西対抗マッチは1970（昭和45）年まで続いたが、その翌年に中止になった。自薦、他薦のメンバー選考を巡ってもめ事になり、主催者のJGAはゴルフの精神に反すると中止に踏み切った。その間の成績は関東の20勝12敗3引き分け。東西の地域交流と技術の研鑽に狙いがあったはずだが・・・。

《写真》

最初（上）と最後（下）の東西対抗戦



伊豆伊東のゴルフ物語

(14) 女子アマチュアの関東、 関西婦人対抗戦

日本におけるゴルフ競技は男子を中心に発展してきたが、昭和の初期には婦人ゴルファーによる東西対抗戦があった。今日、ゴルフの普及は著しく、プロ、アマともに各種競技が開催されるから珍しくもないが、昭和の初期といえばゴルフ人口もゴルフ場も少なく、まして東西対抗という地域の対抗戦があったことは、いま考えれば貴重なことだった。

女子ゴルファーによる対抗戦の発端は、関西にあった神戸、鳴尾、舞子、茨木など各ゴルフ倶楽部の婦人会員たちによるところが大だ。『日本のゴルフ史』（昭和5年発行）の著者・西村貫一氏の夫人まささんは夫君に伴われて外遊しゴルフを覚えた。帰国後は神戸GCで楽しんだという。当時、神戸GCでは外国の婦人ゴルファーが多かったが、外国でゴルフを覚えた日本婦人が徐々に増え、交流を深めるうちに外国婦人と日本婦人の対抗戦をやろうということになった。この集団が関西レディースゴルフ倶楽部（西村まさ、九鬼忠子以下9人）を立ち上げた。

倶楽部が立ち上げれば、必然的に目は関東に向く。関東との対抗戦をやろうというムードが高まり、婦人ゴルファーたちによる東西対抗戦が実現の運びとなった。関西勢は関東に声をかけた。

これに対して受ける立場の関東勢は、東京ゴルフ倶楽部が創設されて日が浅かったが、以前、本欄で取り上げたアメリカ帰りの三井弁蔵氏夫人の栄子さんが中心になり、東京婦人ゴルフ倶楽部を発足させた。倶楽部総裁に朝香宮妃殿下（允子）を迎えて関西勢を迎え撃つことになった。かくして第1回目の対抗戦は1926（大正15）年5月21日、東京ゴルフ倶楽部の駒沢コースで関東・関西婦人対抗マッチという名称で行われた。関東勢は7.5-1.5で圧勝した。競技は午前ダブルス3試合、午後シングルス6競技の各18ホールマッチで行われたが、関東の三井夫人の活躍が目立った。



《写真》

婦人東西対抗戦の一コマ

伊豆伊東のゴルフ物語

(15) 三井夫人の卓越した技術

昭和5年といえは日本のゴルフは成長期にあり、関東では霞ヶ関、我孫子、相模の各倶楽部がその前後に開場して日本ゴルフ協会の加盟倶楽部になったことで、ゴルフは本格的に活動を始めたといえる。

一方、その時代は海外からは著名なプロの訪日相次ぎ、日本人ゴルファーは技術の習得に一生懸命だった。いまの時代とは違いゴルフの専門雑誌は関西で発行されていたが、関東にはなく翌6年、目黒書店から『月刊ゴルフ』が刊行された。

その時代に海外から著名なプロがやってきたが、その代表格は帝王といわれたアメリカのウォルター・ヘーゲンだろう。昭和5年春、曲打ちのジョー・カークウッドを伴い、やってきた。二人はオーストラリア遠征の帰途、JGAとKGU（関西ゴルフ連盟）の要請で日本に立ち寄った。東京、関西で模範プレーを披露したが、関東（東京GC駒沢）での模範プレーに三井夫人が招かれた。夫人はアメリカから数年前に帰国し、日本の生活にも慣れていて、模範競技の日は好調そのもので、イーブンパーの36で回った。

この三井夫人の会心のプレーに驚いたのは帝王だった。ゴルフの後進国の日本で、しかも女性がイーブンパーのスコアで回ったことに驚嘆した。帝王はそのご褒美に自分が愛用していたサンドウェッジをバッグから取り出して、三井夫人にプレゼントした。三井夫人は『あの日は不思議なほど調子が良く、36で回りました。するとヘーゲンはサンドウェッジを1本、ご褒美にくださるというのです』

当時の用具の中にはピッチングウェッジやサンドウェッジの類はなく、バンカーではブリック（現在の8番に相当）を使っていた。ロフトが少ないから脱出には相当骨折ったはず。『ヘーゲンのご褒美は随分と重宝しましたよ』とは三井夫人の感想だったが、世界的な名手がうなった技は、けだし見応えがあっただろう。

《写真》

三井夫人（上）と帝王ヘーゲン（下）



伊豆伊東のゴルフ物語

(16) 大倉財閥の川奈進出

大倉財閥の初代大倉喜八郎（1837～1928）は新潟の出身で、18歳の若さで江戸に出た。鯉節の行商をしていたが、江戸幕末の維新の動乱を機に、鉄砲の商売で一儲けする。

官軍と彰義隊の戦争を、早くから官軍の勝利と見越し、官軍に鉄砲を安く売ったと伝えられる。そのお陰で一代にして大倉財閥を築いた。大倉の見通しの良さは、子息の喜七郎（1882～1963）に受け継がれている、といわれた。

東京から近い距離にある温泉地の伊東は、冬温暖、湯量が豊富で今日の東京都民から見ると休養のための絶好のオアシスだ。ここにゴルフ場があったら…。ゴルフ好きな人はそう考えるだろう。実際にゴルフ場の建設が始まったのは昭和の初期。大倉財閥がゴルフ場の建設に乗り出した。コースの完成後にホテルができたが、規模、内容ともに東洋一といわれた。

ゴルフ好きの文筆家で『連合艦隊の最後』の著書で知られる伊藤正徳（1889～1962）の言葉を借りると『たとえ、本溪湖の鉄鋼は尽きるとも、川奈リンクスは永遠に在る…』

本溪湖というのは、大倉喜八郎が投資して旧満州に造った製鉄所である。新中国製鉄所の近代化計画で、この本溪湖が脚光を浴びた時代がある。1905（明治時代の終わり頃）年頃の話だ。

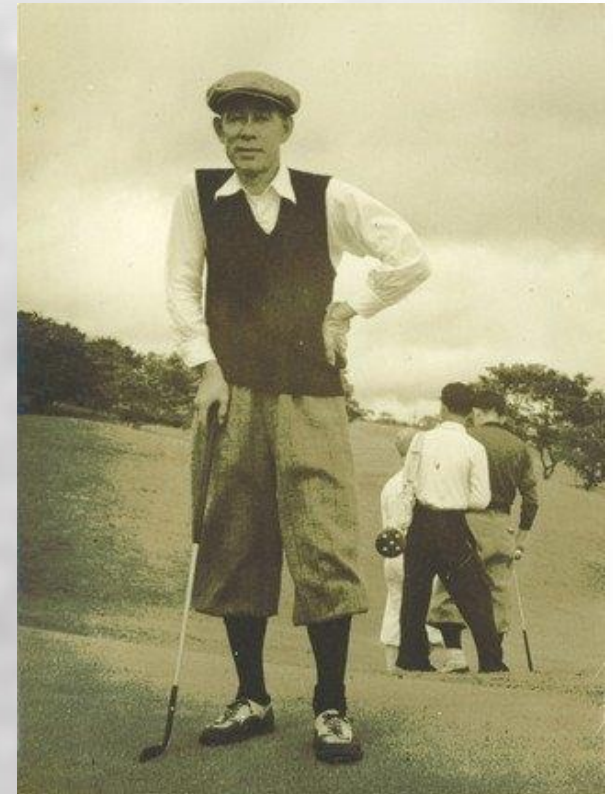
大倉喜七郎が川奈のリンクス（大島コース）を造ったのは昭和3年のこと。

その川奈のことをさらに伊藤正徳の言葉を借りると『本溪湖の埋蔵量は何億トンあるかは知らないが、それが尽きる日はいつか来るだろう。だが川奈のコースだけは永遠に存在せざるを得ない』

川奈のゴルフ場の魅力を表現した言葉だ。

《写真》

川奈のコースと元気な頃の伊藤正徳



伊豆伊東のゴルフ物語

(17) 大倉財閥のゴルフ場建設 (1)

東海道線に丹那トンネルが開通したのは昭和9年のこと。それ以前の東海道線は御殿場を経由していた。だから東京から見ると伊東は遠かった。

『伊東に赴くには国府津で下車し、船を利用していた』（北岡丈人氏）そうだが、温暖な気候で知られる伊東が、日本のゴルフのメッカとなるのは大倉喜七郎がホテルとゴルフ場造りに乗り出して以来のことだ。

大倉喜七郎はもともとゴルフが好きで、東京ゴルフ倶楽部の会員だった。とりわけ、東京GCが埼玉県朝霞にあった時分、よく足を運んだ。東京GCのプロだった橋本秀次郎（平成30年没）は大倉の思い出をこう話していた。橋本は朝霞時代に東京GCの職員として雇用された。最初はドアボーイを務めたが、後にプロになった。橋本の思い出話。

『朝霞時代よくお見えになった。プレーが終わると小走りに、小さなボストンバッグを片手に車に向かった。車に乗ったと思ったら、すぐ戻ってこられた。小さなバッグを持っておられたが、玄関脇にこれを置いて車に戻ると“おい。橋本。バッグを忘れた”と車の中から叫ぶのです』

そのしぐさを橋本はドアの横で一部始終を見ていた。

『畏まりました』とバッグを車に届けると、大倉は橋本に心づけをそっと渡した。

『バッグを届けると大倉さんはポケットから祝儀袋を取り出して渡してくれました。真新しい1円札が入っていた』（橋本）

祝儀袋の中には手の切れるような1円札が入っていたそう。橋本は謹厳実直な青年だったので、大倉は橋本をことさらに可愛がった。橋本は晩年、大倉の思い出をこう話していたが、洒落た大倉の粋な心づけの仕草だった。

《写真》

駒沢会のメンバーと橋本さん＝前列の右端



伊豆伊東のゴルフ物語

(18) 大倉財閥のゴルフ場建設 (2)

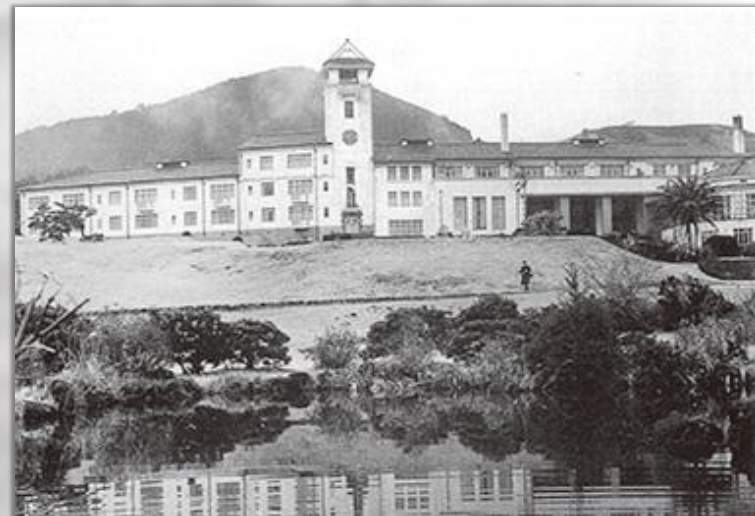
地元民との融和を図った大倉の親心

大倉喜七郎が川奈でゴルフ場の建設に乗り出したのは1928（昭和3）年より少し前だった。この時代は会員制のゴルフ倶楽部建設でも金集めが大変だったのに、個人の財力でパブリック18ホールのコースを造ろうというのだから、大倉の計画に世間は間違い扱いをした。大倉財閥二代目の道楽と見る人が多かったようだ。

しかし大倉は最初からこの川奈の土地にゴルフ場を造る計画ではなかったようだ。牧場にでもしようか、と買った土地で、およそ60万坪の広さがあった。ところがこの土地は石ころが多く、牧場には向かないことが分かり、ゴルフ場造りに目標を変えたい。そこで拡張に迫られた。買い増しの土地の大部分は、川奈で漁業を営む住民のものだった。

伊東の歴史を知る北岡貴人氏によれば『大倉さんが手に入れた土地は、ゴルフ場や他の施設を造るには少々狭い。そこで土地拡張の必要に迫られた。買収に当たって川奈地区の住民との間にこんな約束をとりつけた。川奈地区は水が足りない。飲料水の確保と住民が働く場所の提供』だった。

大倉は土地を求める際、水を引く工事を提案した。その事業費数万円を負担することにした。水は伊東市の小室地区から川奈のゴルフリンクス拡張と観光施設充実へと引かれた。地主たちは長年、抱えていた水不足の悩みという難問を解決できる見通しが立った。川奈地区の住民は水を得るために雨水を貯め、熱湯にして消毒し、それを冷まして炊飯などに使っていたそう。川奈リンクス建設の裏にあった大倉と地主との交流的一幕である。



《写真》
川奈ホテル

伊豆伊東のゴルフ物語

(19) 大倉財閥のゴルフ場建設 (3)

札幌の大倉山シャンツェ、金メダル飛行隊奮戦の場

大倉喜七郎が川奈ホテルに付随した18ホールのパブリックコースを完成させたのは1928（昭和3）年だが、ほぼ同じ時期だが札幌にスキージャンプ台を完成させている。

1972年の札幌冬季五輪の際、このスキージャンプ台で日の丸飛行隊の笠谷幸生らが健闘して金メダルを獲得している。この時は金メダルだけに大勢の眼が集中したので《大倉ジャンプ台》の建設者のことは話題にはならなかったが、大倉の名を今に留めている一例だ。

さて、川奈の大島コースの設計はゴルフ界の父と慕われている大谷光明だが、山を切り開いて造られただけあって、コースは起伏に富み、歩くと骨が折れる。しかし、その時代はゴルフの普及に拍車がかかり、各地に名コースが誕生したこともあって川奈はさらに脚光を浴びた。

川奈では大島コースに次いで富士コースが1936（昭和11）に開場した。英国のコース設計家で有名なチャールズ・アリソンの設計である。1930（昭和5）年、東京ゴルフ倶楽部が新コースを造るに当たって招いた設計家だった。

作家の伊藤正徳が残した名文句『本溪湖の石炭の埋蔵量はなん億トンあるかは知らないが、それはいつか尽きるだろう。だが、川奈のコースだけは永久に存在せざるを得ないのだ』川奈、伊東の温泉プラスゴルフの魅力をこんな言葉で表現をしている。

1928（昭和3）年、秩父宮が北海道でスキーを楽しまれた後、大倉に『札幌に施設が完備すれば世界的なスキー場になる』とおっしゃられ、大倉山のジャンプ台は実現したそう。完成は1931（昭和6）年だった。

《写真》

札幌＝大倉山のジャンプ台



伊豆伊東のゴルフ物語

(20) 大倉財閥のゴルフ場建設 (4)

馬にまたがりゴルフ場用地探し

『ウチのお父ちゃん』というセリフで有名だった大屋政子さんは、ご主人の元帝人社長だった大屋晋三が川奈でホールインワンを出したということもあり、こよなく川奈を愛したゴルフファーの一人だった。

その大屋政子が人間・大倉喜七郎についてこんな思い出話をしたことがある。

『戦前のことですが、帝国ホテルの社長をしておられ、戦後は公職追放で一時、身を引いておられました。帝国ホテルの会長に返り咲こうとしましたが、それが果たせなかったそうで、その代わり帝国ホテル以上のホテルを造ってやる。と立ち上がったのがホテルオークラでした。』

日本棋院の創設に尽くさはった方。芸術に造詣が深く、洋楽と邦楽、西洋美術と日本美術の融合を唱えるなど大変な趣味人でした』 さらに大倉にまつわる話としてこんなこともあったそうだ。

『昭和の初めにあの広大なゴルフ場とホテルを造るについては、さすがの大倉財閥の中でも、賛成者は誰一人としてなく、親戚一同から“準禁治産者”のような目で見られたこともあったそうです』

この話を受けて大倉は『親戚から湯水のように金を使う。あんなばけものみたいなもの（ホテルとゴルフ場）を造って、いったいどうする気だ。と非難、攻撃されたけど、戦後あの川奈はゴルフファーのメッカといわれるようになった』と得意そうだった。

『伊豆の山にゴルフ場を造るときに、大倉さんは馬にまたがり、山を越え、谷を渡って土地を歩いたそうです。大倉さんが大切にしたい丁重なサービス精神は、東京・赤坂のホテルオークラで生きている、とは大屋さんや顧客の声だ。』

《写真》

大屋晋三夫妻



伊豆伊東のゴルフ物語

(21) 川奈のゴルフコースに税金 閉鎖騒ぎが勃発

今日、日本政府はゴルフに税金をかけている。だが、スポーツに税金がかけられるのはおかしいという声が皆無ではない。実はゴルフに課税という制度は静岡県と福岡県にあった。静岡県では昭和9年2月、ゴルフ入場税という制度を設けた。

これに反対したのは川奈のゴルフ場（大倉喜七郎社長）で、ゴルフ場閉鎖という前代未聞の重大事件があった。

事の起こりはその前年の11月、静岡県議会で県知事がゴルフ場に目をつけ、入場者一人に対して一円を徴収しようと発案したことにある。これに対してゴルフ場側は真っ向から反対した。その波紋は静岡県のみならず、日本全国に広がった。単にスポーツ界に留まらず、時の政府にまで余波が及んだ。

この問題には賛否両論があった。課税賛成派は静岡県側で県の財源が乏しいので、旅館の“女中さん税”まで提案した。娯楽性のあるゴルフは当然と主張した。

当時、課税賛成派は内務省首脳陣で、反対派はゴルフ愛好家の鳩山一郎・文部大臣ほかゴルフ界の首脳陣で、スポーツに課税は誤りだ、と主張した。このニュースは朝日新聞が熱心に報道した。だが編集局の内部でも賛否両論に分かれて揉め、逆にゴルフ界の話題にもなった。

静岡県知事は世論を察して税額を半額にすると発表した。同年2月、川奈は閉鎖を決めた。大倉は『赤字を覚悟で観光ニッポンのためにやっているのに、理解されないのなら閉鎖だ』と断言した。知事は『金持ちのわがまま』といったが、朝日の副社長だった下村海南は知事に翻意を促す意味で『川奈でゴルフをやるのは止めよう』とゴルフアーに訴えた。

《写真》

税金反対派だった鳩山一郎元総理大臣



伊豆伊東のゴルフ物語

(22) 戦時中のゴルフ競技 (1) ～政府、舶来色一掃に懸命

ゴルフは打球、テニスは庭球に

日本のゴルフは太平洋戦争中、禁止にはならなかったが、自粛した時期があった。戦争の最中、ゴルフコースは食糧増産のために畑になり、薩摩芋やカボチャの栽培が盛んだった。米は配給制度で流通が規制され、白いコメの飯には容易に巡り会えず、主役は麦飯か『すいとん』だった。

《贅沢は敵だ》なんていう標語が流れ、パーマのお洒落は禁止され、《欲しがりません、勝つまでは・・・》と国民は歯を食いしばった。

そんな苦しい環境にスポーツを制限する統制令が出た。昭和17年、時の東條内閣によって発令されたものだ。日本のスポーツを統括している日本体育協会は解散させられ、加盟団体で舶来色の強いスポーツはことごとく排除された。剣道や柔道などは新生の大日本体育会に編入され、英語禁止の時代だからテニスは庭球、バスケットボールが籠球、バレーボールは排球といった具合に言い換えさせられた。舶来色の強いゴルフは当然、排除と見られていたが、ゴルフ界の賢者の発案で排除を免れた。

石井光次郎（元衆議院議長、当時は日本ゴルフ連盟理事）は粋な主張をした。

『ゴルフは日本古来の遊戯だ。西暦727年（神亀4年）頃、春日野で王子たちが打球に興じた』（百科事典に掲載されている）という一節を持ち出した。ある日、文化映画で視た一シーンだった。お陰でゴルフは抹殺を逃れ、大日本体育会に残留でき、ゴムの配給を受けながら細々と活動できた。競技団体の名前は『打球部会』、ゴルフ場は打球場と改められた。日本語化の一例としてプロの名称は打球戦士だった。

《写真》

打毬の一場面と石井光次郎





(23) 戦時中のゴルフ競技 (2) ～学生ゴルフは細々と・・・

昭和17年の太平洋戦争の最中、スポーツを制限するスポーツ統制令が時の東條内閣から発令された。舶来色の強いスポーツの排除だった。日本のスポーツを統括する日本体育協会は解散させられたので、舶来色の強いゴルフは当然、排除とみられていたが、ゴルフ協会は打球部会と名を変えて生き残った。

ただし全国規模の競技会（日本打球選手権など）の開催は控え、地方大会のみになった。戦時中のことから軍事優先で、一般の旅行は控え目。しかし、1943（昭和18）年度のゴルフ競技は地方大会のみの競技日程が組まれ、東西の大会が行われた。

関東地区は関東打球大会（関東アマ）、関東専門打球大会（関東プロ）、関西も同様だった。

学生のスポーツ（六大学野球など）は学徒体育振興会の傘下に置かれた。だが学生ゴルフは振興会から除外された。しかし、学生の旧団体である全日本学生ゴルフ連盟は、72ホール鍛錬競技、全日本学生選手権、全日本大学リーグ戦を挙行した。

日本のゴルフ界は1940（昭和15）年には、キャディを廃止（60歳以上は除く）し、ゴルフ大会の賞品を与えないこと。私的競技、団体競技（アマ、プロの東西対抗）を行わず、ゴルフは技術本位、心身鍛錬を目標にするものに限られ、飲食の簡素化、自家用車の禁止、贅沢は慎むということが申し合わせていた。

この年には銀器献納という政令が出て、各ゴルフ場が使っていた銀製のカップ類が大砲や鉄砲の弾になるのを目標に地方の公共団体などに供出させられた。

《写真》

戦時下のゴルフに関する日本ゴルフ協会の決定事



伊豆伊東のゴルフ物語

(24) 銀器献納～鉄砲の弾丸になり損ねた由緒あるカップ

戦時中のこと。各家庭やスポーツ団体が保有していた銀製のカップやトロフィーなどが、政府の命令で国に献納させられたことがある。供出したカップの類は、大砲や鉄砲の弾になるということだった。忠実な国民はその目的を果たすために、こぞって由緒あるカップや金属類を供出した。

《欲しがりません。勝つまでは・・・》の精神に燃えてのこと。由緒ある銀器を献納した国民は、大砲や鉄砲の弾になり、敵をさんざん“懲らしめている、と信じたに違いない。

ところが戦後、いや今日の平和になってからのことだが、古い倶楽部の会員が、商社マンとして米国に駐在していた時分に米国の古物商からカップの売り物がある、という売り込みを受けたそう。その会員は骨とう品に興味を持っていたわけではないが、古いカップと聞いて興味を覚えたので、足を運んでみたら、なんとそのカップに自分が会員になっている倶楽部名が刻まれていた。

早速、倶楽部に連絡して委員会に諮ったところ、買い戻そうということになり、国内の古物商経由で買い戻しに成功した。カップは由緒あるものだった。その流浪の旅は銀器献納という大義名分の下に行われたものの、結局は弾丸にはならず、終戦直後、地方自治団体の事務所から持ち去られたらしいが、日本に駐留した米兵が日本土産として持ち帰ったそう。だが元米兵は高齢化が原因で古物商に売り渡したという足跡が判明した。献納されたカップは地方自治体から軍需工場に運ぶ手立てがなく、放置されていたらしい。鉄砲の弾になり損ねたカップの『一人旅物語』だった。

《写真》

銀器献納で姿を消したカップ（摂政杯）





(25) ゴルフ用語の日本語化 ～打球部会苦心の作

日本のスポーツは剣道、相撲や柔道を除くと、海外から持ち込まれたスポーツが多い。大衆化されている野球、ゴルフやラグビーなどの球技は海外からのものが大部分だ。

そのために用語は英語だった。しかし、戦時中は英語が禁止されたので日本語で表現しなければならなかった。野球のストライクは『よし』とコールした。そこで一番多く英語が使われていたゴルフの日本語化は苦勞したようだ。

ゴルフを統括する大日本体育会打球部会（現日本ゴルフ協会）が昭和18年9月に制定委員会を設置して用語の日本語化を実行した。その主な用語の一部を紹介したい。

（カッコ内は日本語化された用語）

- ・ゴルフ（打球） ・ゴルフ場（打球場） ・ホール（競区）
- ・マッチプレー（区数試合） ・スクラッチ競技（無釣率競技）
- ・オナー（勝ち順） ・パートナー（味方） ・プレークラブ（打杖）
- ・パター（短杖） ・スコア（記録） ・スコアカード（打数票）
- ・ハンディキャップ（均率） ・ネット（差引） ・バーディ（隼）
- ・イーグル（鷺） ・ホールインワン（鳳）
- ・Aクラス（甲級） ・Bクラス（乙級） ・インパクト（打撃）
- ・スライス（右曲がり） ・ソケット（逸れ打ち）
- ・アウトオブバウンズ（逸れ球） ・プロ（専門選士）
- ・ロッカー（備品函） ・グリーンフィー（使用料）
- ・クラブハウス（会館） ・ゴルフクラブ（打球会）

《写真》

邦文化の一覧表

英語	日本語
GOLF	打球
GOLF COURSE	打球場
HOLE	競区
MATCH PLAY	区数試合
SCRATCH PLAY	無釣率競技
HONOR	勝ち順
PARTNER	味方
PLAY CLUB	打杖
PATTER	短杖
SCORE	記録
SCORE CARD	打数票
HANDICAP	均率
NET	差引
BIRDIE	隼
EAGLE	鷺
HOLE IN ONE	鳳
A CLASS	甲級
B CLASS	乙級
IMPACT	打撃
SLICE	右曲がり
SOCKET	逸れ打ち
OUT OF BOUNDS	逸れ球
PRO	専門選士
LOCKER	備品函
GREEN FEE	使用料
CLUB HOUSE	会館
GOLF CLUB	打球会

昭和十八年九月



(26) 戦時下のゴルフ競技 ～プロ、アマとも地域大会のみ

第二次大戦中、ゴルフは禁止されたわけではないが、自粛ムード一点張りで、競技は友好ムードより技術本位が強調され、もっぱら身心鍛錬という言葉を目的に掲げた。競技会の開催などは自粛ムードが強く、アマチュアの全国規模の競技会は行われず、地域大会のみとなった。関東地区は関東打球大会。関西地区は関西打球大会となり、プロも同様に関東、関西の専門打球大会となった。昭和18年のこと。遠征の旅行などの無駄な動きは自粛という空気が強かった。

全国のゴルフを統括する日本ゴルフ協会はその前年に解散させられた。新しく生まれたゴルフの統括団体である打球部会が発表したこの年度の事業計画は、戦時体制の時局を考慮したものだった。ゴルフ自粛ムードの空気を象徴しているのは、ゴルフボールの配給制度であろう。

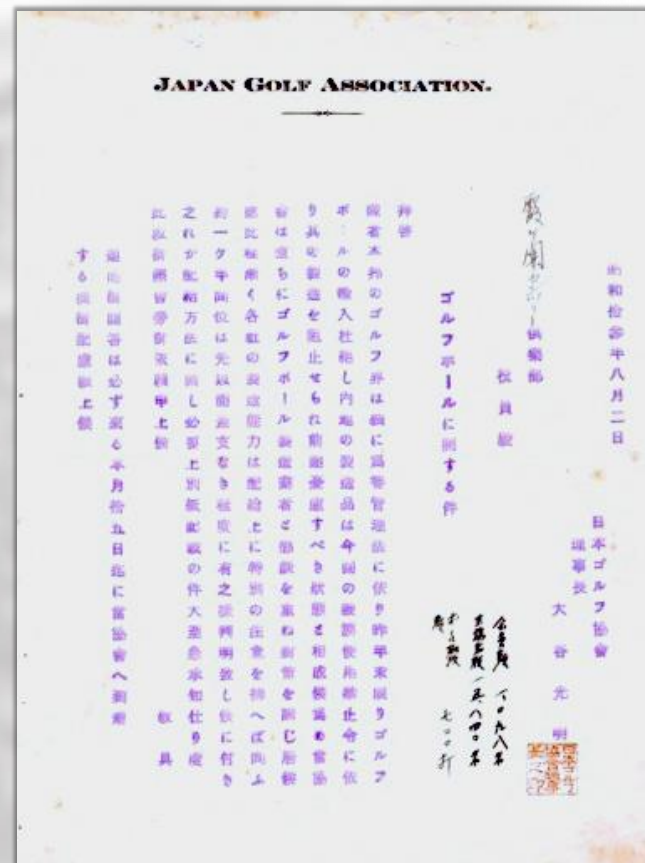
戦時態勢に入った昭和13年に決定、10月から実施されたが、国の産業は軍需物資生産が優先で、レジャー用品の生産は二の次だった。

ゴルフボールの配給制度は加盟倶楽部の理事長宛てに通達され、月ごとに協会から割り当て数の連絡があった。

日本のゴルフ草創期のゴルフボールは、輸入されていたために高価だった。国産化されて少し安くなったが、1個1円の時代があった。今日、1円といえばアルミニュームの1円玉と軽く見てしまうが、当時はボール1個が1円といえば大変に高価で《円タク》という言葉にご縁がある。円タクという言葉は1円の均一料金で走るタクシーのこと。ボールの値段がこれに匹敵したというから、ボールがラフに入ると血眼になって探したのはよく分かる。

《写真》

昭和14年に発行されたゴルフボールの配給通知文





(27) 米軍のゴルフ場接收 ～接收は紳士的にゴルフ王国 の勝者らしく

日本のゴルフ場は戦時中、食料増産のために芋畑になったが、戦後日本に駐留した米軍によって接收されたゴルフ場が多かった。北は北海道から南は九州まで。しかし戦時中は日本の陸海軍が昭和20年1月ごろからゴルフ場のクラブハウスに駐屯した。空襲で兵舎を焼かれ、一時的な間借りだった。いまに残る昭和20年1月の東京ゴルフ倶楽部日誌によれば、ここは海軍航空隊によってゴルフ場全部が借入れられ、軍需物資分散のためで、大きな建造物である倶楽部ハウスが絶好の貯蔵倉庫として使われた。

日本国内は連日、B-29の焼夷弾攻撃で焼け野原になった。しかし、8月15日の終戦を迎え、恐れおののいた空襲の恐怖から解放された。

真夏の暑い日から解放された秋に入ると日本に駐留した米軍のゴルフ場接收が始まった。東京GCに残された業務日誌にはこんな記述がある。

『昭和20年10月13日 米軍第97部隊来場、宿営のため本館借り上げられる
尚宿営人数は200名の予定』

『次にゴルフクラブ約50セット、食器数炊事用用具借り上げられる』

『ただし、コースは一般会員使用随意なり』

こうした記述から想像できるのは、米軍用としてゴルフコースは兵士のためのリクリエーション施設として使うのが大きな目的だったようだ。接收といっても乗り込んできて、腕ずくで占拠するのではなく、使用目的を明確に伝え、使用料を払うといった極めて紳士的な一面があった。ゴルフの国のプライドだったのだろうか。

《写真》

米軍に接收された東京ゴルフ倶楽部の駐車場風景

MEMBER'S REGISTER BOOK		
MEMBER'S NAME	DATE	NUMBER
島崎彦次郎 和田吉蔵 石川(不明) 高木喜寛(理事長) 成瀬岩雄	20.7.1	
和田吉蔵 島崎彦次郎	20.7.8	
加藤三三(役員) 仲尾二郎(役員) 島崎彦次郎 和田吉蔵	7.15	
島崎彦次郎	7.22	

伊豆伊東のゴルフ物語

(28) 日本のゴルフ場接收後～米軍 家族が教えたファミリーゴルフ

日本に本格的なゴルフが根を下ろして30年を経過した頃から、女性ゴルファーの出現が目立つようになった。それまでのゴルフは男性の遊びだった。日本的な風習で、女性は家庭に引きこもり、スポーツで戸外に出るのは好まれなかった。戦前の日本のゴルフ界では、ゴルフを手掛けるご婦人は極めて少なく、女性のための競技はあったが、限られた階層の方々のみで、例えばプロゴルファーの奥方でさえ、容易にゴルフ場に顔を出すことはなかったようだ。プロの元祖、安田幸吉さんの夫人は『結婚して40年、50年経ちますがけど、ゴルフ場に出向いたのは僅かに一度だけです』と話したことがあった。

しかし、米軍が日本のゴルフ場を接收して以来、彼らは家族ぐるみでゴルフ場に足を運び、将兵のご婦人方もコースへ出た。

彼らの主張はファミリーゴルフ。老いも若きもコースに出て太陽を浴びながらボールを追う。これまでの日本にはない習慣を持ち込んだ。

日本の女子ゴルフ選手権の創始は昭和34年だが、きっかけは数年前の日米の婦人親善マッチだった。会場は神奈川県相模のCC。戦後、火災に見舞われたため米軍の接收を免れた。と同時に芝の肥料に人糞を施した。さすがの米軍も接收を敬遠した。このためにホームコースを接收され、自由に使えない他倶楽部の会員たちが相模を利用した。そこで日米の婦人ゴルファーによる親善マッチが行われた。だが遊び感覚旺盛な米軍婦人と対抗意識を真面目に考えていた日本婦人とは、勝負にならなかった。日本側の勝利の陰に、婦人方もクラブを振ろう、という空気が流れた。

《写真》

米軍の家族ぐるみのゴルフの一コマ



伊豆伊東のゴルフ物語

(29) 『カワナ。懐かしい』 ～川奈に駐留した元米兵の思い出

毎年、春になるとアメリカでのゴルフトーナメント、『マスターズトーナメント』がゴルフ界の話題にのぼる。このトーナメントは戦前の昭和10年に、アメリカへ遠征した日本のプロたちも出場している。当時はボビー・ジョーンズが創始した競技としてごく小規模な競技だったが、いまは世界的な大きなイベントに成長した。以前のことが、これを取材した時のこんな話がある。コースの9番を歩いていたらガードマンに声を掛けられた。

『あなたは日本から来たゲストか』に次いで『川奈のゴルフ場をご存じか』『私は兵役時代に日本へ駐留していた。川奈のゴルフ場にいたが、いまあのゴルフ場は現存しているか』と突然、川奈の話を持ちかけられた。

さらに『あそこのゴルフ場にはチェック・チンというプロがいた。彼はうまい英語を話していた』と懐かしがっていた。

オーガスタの町といえば、近くに米軍の通信基地がある。フォートゴードン基地で、ここには昭和25年の朝鮮動乱の際、戦場に向かった元兵士が多く住んでいて、その元兵士と結ばれた日本人が多い。時代が流れ、さて、どのくらい健全か。元米兵の記憶にあった陳清水さんは戦後、川奈ホテルに勤務した。物腰が柔らかい、戦前派のプロだった。流ちょうな英語で人をそらさない対応で、米兵の間でも知られた存在だった。

『礼儀作法は川奈仕込みだった』（長女の神原美和さん）。

《写真》

オーガスタナショナル倶楽部の正面玄関



伊豆伊東のゴルフ物語

(30) 安田幸吉の徴兵検査 ～第二丙種で兵役免除

日本プロゴルフ協会初代の理事長、安田幸吉にはこんな体験がある。1925（大正14）年の満20歳の時、明治憲法下の兵役法に従って徴兵検査を受けた。口頭試問の際、試験官は職業について質問した。『お前の職業は？』に安田は『ハイ。ゴルフ場のプロであります』と答えたが、理解してもらえなかった。検査官はゴルフの知識に乏しく、さらに、どんなことをするのか、と聞いてきた。

安田はどう答えたらいいのか。しばし思案の末、こう答えた。『朝香宮様や皇族、財界の方々がお見えになり、ゴルフを教えています』と答えたら試験官は理解した。しばし周囲と相談の上、こんな結論を出した。

『そうか。お前はがいなくなるとお偉い方々は困るだろう。第二丙種だ』と兵役免除の結果を言い渡された。第二丙種とは不具者扱いである。安田は身長こそ160センチに満たない小柄だが、身体強健でしかもゴルフのプロである。この結果、兵役は免除となり、普段通りにゴルフ場勤務を続けられたという。

安田は1905（明治38）年、東京の駒沢に生まれた。

東京ゴルフ倶楽部は1913（大正2）年、この地に創設された。ゴルフ場の用地は、いまは東京オリンピック記念公園になり、東京都民のオアシスだ。地元の尋常高等小学校を卒業するとお行儀見習いの名目でゴルフ場のキャディーになり、キャディーマスターを経てプロになった。ゴルフをたしなまれる常陸宮の指導役を仰せつかり、皇居内でレッスン中に天皇、皇后にもお声を掛けられたそうだ。日本が生んだプロゴルファーの元祖的な存在である。

《写真》

昭和10年、米国遠征をした時分の安田幸吉（左端）



伊豆伊東のゴルフ物語

(31) 二等兵が大將になった話 ～岩倉二等兵のゴルフ経験

東京ゴルフ倶楽部が東京・駒沢にあった時分、安田幸吉とほぼ同世代に、岩倉末吉というプロがいた。東京GCでプロになり、後に程ヶ谷CCの専属になり、兵役に服していたが戦死した。

彼が昭和5年、徴兵検査を経て陸軍に入隊した頃の話だ。北京駐屯の部隊に配属された際の『北京の休日』の物語である。

北京に駐屯しての休日、北京の散策に出かけた。岩倉二等兵が練兵場のそばを通りがかった時のこと。一人の将校がボールを打っていたが、うまく当たらない。

これを見た岩倉二等兵は、無性にボールを打ってみたいくなり『あのう……。私に一発打たせてもらえませんか』とゴルファーに声を掛けた。将校は『なに！ 兵隊なんぞに打てるもんか』と取りつくしめない。しばし押し問答の末に、将校は、『そんなに打ちたいか』『だったら一発だけ打たせてやる』に、岩倉二等兵は『有難うございます』と打った。するとボールは真っすぐ、遠く飛んだ。これに驚いたのは将校だった。『おい！ お前は一体誰だ』に、岩倉二等兵は『ハイ。岩倉二等兵です。軍隊に入る前はゴルフのプロでした。昭和三年のプロゴルフ大会で三位でした』

この話は軍隊の中で広まり、やがて部隊長の耳にも入った。さらに外交団までに広がり、岩倉二等兵は外交団にレッスンをするようになった。教え方は好評で、外交団から先生呼ばわりされた。この結果、二等兵は先生とあがめられ、大將のような破格の厚遇で迎えられた。

《写真》
岩倉二等兵のショット



伊豆伊東のゴルフ物語

(32) 涙なしでは語れない兵役体験 ～弟子はもっぱら慰め役

全日空が主催する札幌のゴルフトーナメントは、創始以来45年の歳月が流れているが、第2回大会でオールドタイマーの模範プレー披露という企画があった。創設当初は航空会社の大会だから、スチュワーデスにユニフォーム姿でコースの案内役をお願いした。大会2年目に、もう少し工夫をこらした企画はないか、ということになり、マスターズトーナメントに倣ってベテランプロの模範プレー披露の企画が出た。最終日の第一組スタートの前でプレーしてもらうことになり、選ばれたベテランプロは宮本留吉、安田幸吉、浅見緑蔵、陳清水の4人だった。

その前夜、全日空広報部の配慮で歓迎の宴が開かれ、ベテランプロたちの、同窓会のような雰囲気になり昔話に花が咲いた。安田幸吉の徴兵検査の思い出、陳の程ヶ谷での修行時代、浅見の兵隊時代、宮本は昭和7年の英国遠征を語ったが、涙を誘ったのは浅見の兵隊時代だった。

浅見は当初、徴兵検査の末、海軍入隊の予定だった。ところが鳩山一郎（文部大臣）の配慮で陸軍になった。兵役年限が海軍より1年短く、早く除隊になり、ゴルフ界に戻って来いという鳩山の配慮だった。

浅見の思い出はこうだった。昭和5年、アメリカからウォルター・ヘーゲン、ジョー・カークウッドが来日し、東京、大阪で模範プレーを披露した。兵役に服している浅見は朝香宮鳩彦殿下（陸軍大将）の配慮で軍服姿のまま、観戦を許された。人目を避けるように観戦したが、とめどもなく涙が流れた。本来なら自分が出場の立場にあったのに・・・。

『二度とゴルフはできない』

この段になると大柄な浅見は、人目をはばからず大声で泣きじゃくった。慰め役は陳清水。それもそのはず、陳は浅見の弟子だったからだ。

《写真》

全日空札幌オープンの余興・模範競技で昔ながらのファッションでコースに立った4人のオールドタイマー



伊豆伊東のゴルフ物語

(33) プロゴルファーのかくし芸 ～玄人はだし、中村の清元

今どきのプロゴルファーのかくし芸といえば、定番はカラオケで美声を披露する程度だろう。だが、戦前派のプロたちの中には本格的な芸人がいた。古くは中村兼吉だ。愛称は兼さん。東京GCのキャディーを振り出しに、神奈川県藤澤CCから大連の星ヶ浦のプロとして活躍した。昭和7、8年に関東プロゴルフ選手権に連続優勝している。翌8年には日本オープン選手権に勝ち、大連時代は満州のプロ選手権にも勝った実力者だった。その上、当時のプロには珍しい旧制中学出だった。

兼さんの得意芸は清元。その渋い声は玄人はだしという評判だった。昭和初期における兼さん藤澤時代の話だが、噂によると芸者の置屋で清元の稽古に励み、置屋からゴルフ場通いをしていたという。これが会員の耳に入り、逆鱗に触れて大連へ左遷されたという話もある。

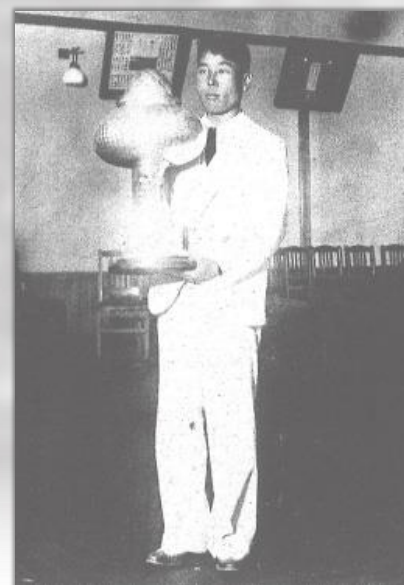
昭和10年、安田幸吉ら6人のプロたちと日米対抗のため日本代表に選ばれて、アメリカ本土を転戦した。全米オープン選手権出場に恵まれて58位タイの好成績を残した。この折りにラジオのインタビューを受け、団長加沼豊の通訳で兼さん一生一代の誇らしい声が全米に流れた。

この年の全米オープン選手権にアメリカ遠征をした6人は予選免状の破格の待遇だったが、前半をクリアーでき、後半に進めたのは兼さん一人だった。中村は昭和49年2月、64歳の若さで他界したが、飛ぶクラブ造りに心血を注いだ。

《写真》

(上) 中村兼吉（前列の右端）～米国遠征の横浜港出帆時

(下) 日本オープン選手権を制した中村兼吉



伊豆伊東のゴルフ物語

(34) プロゴルファーのかくし芸 ～帝劇の舞台を沸かせた林由郎 の兵隊踊り

林由郎。

いまはその存在は記憶の彼方だが、戦後のゴルフ界で一世を風靡した名プロだった。千葉県我孫子出身。生家は我孫子GCの近く。昭和9年13歳の時、キャディーとして我孫子GCに入り、17歳の昭和13年の夏に我孫子で行われた関東プロゴルフの月例競技に参加を許されて3位（ハンディキャップ5）に入賞してプロとして認められた。しかし昭和17年に徴兵検査で甲種合格となり陸軍の近衛砲兵隊に入隊した。宿舎の廊下一つ隔てた部屋に浅見緑蔵がいたという。やがて終戦となり、馬一頭を使って農業をやっていたが師匠、山本増二郎のお声がかりで我孫子GCに復帰できた。その兵隊時代の経験がかくし芸の習得に役立った。

林の得意芸は『兵隊踊り』で、自前で陸軍の軍服、戦闘帽、ゲートルに小銃を揃えていた。舞台に立つと、進軍ラッパが鳴り響く中、軍服姿の林はひょうきんな踊りを披露した。

起床ラッパの音に釣られてのセリフは『起きろ、起きろ。皆起きろ。起きぬと隊長さんに叱られる！』

昭和30年代の半ばだったが、浅草育ちの軽演劇人の特別公演が帝国劇場で開かれ、コメディアン、ストリッパーとともに舞台に立ち、コミックな踊りを披露し、その滑稽さは満場の爆笑を誘った。身長159センチ。体重60キロ。プロスポーツマンとしては大きくない。が、茨城弁でしゃべる仕草は、ユーモアがあった。昭和27年、アメリカに遠征し、大柄なアメリカのプロに比較すると大人と子供。それでも林は日本人として頑張った。



《写真》

林由郎（米国遠征時～中央）大柄なアメリカのプロに交じるとまるで子供だった



(35) 関東プロゴルフ月例競技の納会 ～箱根地を替え歌で賑やかに

関東のプロゴルファーを統括する団体に関東プロゴルフ協会という団体があった。いまはプロゴルファーを統括する団体は日本プロゴルフ協会一本だが、関東と関西に分かれて地方団体があり、それぞれが選手権を開催していた。

関東の団体は昭和6年、赤星四郎、田中善三郎の手によって創立された。その狙いは打倒関西の宮本留吉にあった。

というのは第1回の日本オープン選手権がアマチュアの赤星六郎で、以後、浅見緑蔵が1回勝ったきりで、関西勢にタイトルを取られ続けていた。そこで関東のプロの奮起を促す意味で関東プロゴルフ協会を設立し、腕を磨く狙いで関東プロ選手権を創始した。赤星と田中は関東に点在する各ゴルフ倶楽部に働きかけ、資金の調達に動いた。かくして関東プロゴルフ選手権を開催して技能の向上を図った。

これに呼応して川奈ホテルも関東のレベルアップという狙いでプロの招待競技を開催した。その一例が川奈における関東プロゴルフ協会の月例競技だった。

さて、関東プロゴルフ協会の納会は例年12月、箱根・仙石ゴルフコースで行われた。競技終了後はホテル主催の宴会が催され、お開きになるとバスで小田原まで送ってくれた。アルコールが回っているから余興の続編が繰り広げられた。誰いうとなく『よっちゃん。やれやれ』と叫ぶと、やおら林がマイクを手にとり歌い出す。

♪あなたのリードで コースに出たが
フック スライスに悩まされ
入れなきゃ よかった あのバンカーに
これが苦勞の始めでしょうか♪
(神楽坂はん子の芸者ワルツ)

《写真》

関東プロ月例競技



伊豆伊東のゴルフ物語

(36) プロの恩返し～賞金を差し出した石井（朝）の気質

川奈育ちのプロゴルファーの一人に、石井朝夫という実力者がいる。富戸の出身で石井一族の一員だ。関東オープンなど幾多の内外におけるトーナメントに勝っている。

かつて川奈生まれの若者たちが、社会的に葬られないためには、『漁師になるか。ゴルフのプロになるか』といわれていたそう。アメリカにおける白人、黒人との社会に似ている。黒人が社会的に葬られないためには、ボクサーになるか。ジャズメンになるか。黒人で世界ヘビー級のチャンピオンになったジョー・ルイスが残した言葉だが、それに準えた言葉である。

石井は戦前、川奈のコースに入ったが、戦時中は徴用工として働いた。復員後、川奈のゴルフ場に戻ったものの再雇用されず、路頭に迷った。食うためには、生活基盤が欲しい。そこで新橋でゴルフショップを経営していた松島杲三に泣きつき、ショップの屋根裏に住まわせてもらった。食住の安定感を保ちながらプロゴルファーとして上を目指した。

昭和27年、読売新聞社が『読売プロゴルフ百万円賞金トーナメント』というゴルフ競技を主催した。優勝賞金は30万円、2位が20万円。“ワンパット10万円のスリル”というキャッチフレーズが話題になった。第1回大会は林由郎が勝ち、石井は第2回に優勝した。賞金は30万円。石井は賞金が入った袋の封を切らずに松島の夫人に差し出した。そればかりではない。80歳を過ぎても松島が経営するゴルフ練習場で、お礼奉公と称してギャラなしでレッスンを担当した。『食うに困ってのことじゃないよ』が石井の口癖だった。

《写真》

(上) 昭和32年の関東プロゴルフ選手権で健闘する石井朝夫

(下) お元気な頃の松島杲三さん



伊豆伊東のゴルフ物語

(37) 関西勢に対抗する～関東プロゴルフ協会の立ち上げ

日本全国のプロゴルファーを統括する競技団体の日本プロゴルフ協会（男子）は昭和34年の創立だが、それ以前には全国的に統括する組織はなく、関東、関西の両地区別に分かれていた。全国的な組織になったのは、アマチュアの大御所、野村駿吉のアドバイスによるが、野村は日本ゴルフ協会の副会長を務めたゴルフ界の大物で、ゴルフの普及、発展に貢献した人物だ。1927（昭和2）年の日本アマのチャンピオンでもある。

神戸高商（神戸大）を卒業後、三井物産、三菱商事に勤務して石油関係の業務に携わった。カルテックスの取締役などを務めた関係で世界のゴルフ界の顔役だった。その野村は早くからプロゴルフ協会の独立を唱えていた。『アマチュアの団体が関与するより、プロはプロ自体で協会を運営すべき。その方がスポンサーも付きやすい』と今日の隆盛を予測するような意見を持っていた。

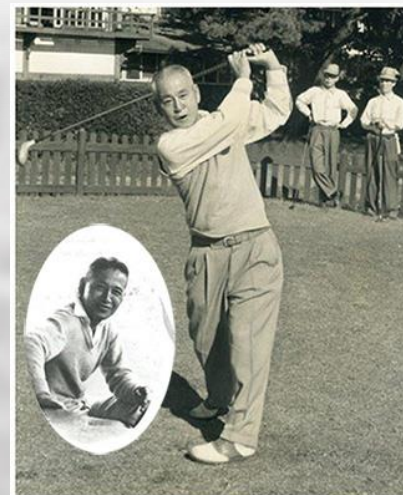
その下地である関東プロゴルフ協会は1932（昭和6）年に結成された。こちらは石井光次郎の提唱で、これに赤星四郎が協力した。狙いは関西勢に押され気味の関東のプロたちの奮起を促すことで、関東のプロゴルフ選手権を創始して、技術の錬磨や意識の向上を図るところに狙いを置いた。

日本オープンのタイトルは1928（昭和3）年から連続して関西勢の宮本留吉にさらわれていたからで、打倒関西勢が創設の目標だった。

《写真》

（上）在りし日の野村駿吉

（下）在りし日の石井光次郎



伊豆伊東のゴルフ物語

(38) 名手を生んだ川奈の舞台 ～富士コースで脚光を浴びた戸田

川奈のゴルフリンクスは昭和9年、富士コースが完成して日本では36ホールを備えた指折りの有名なゴルフ場になった。その間、静岡県との間で課税問題がこじれてゴルフ場閉鎖という大きな事件があったものの、オーナー大倉喜七郎のゴルフ普及にかけた情熱が着実に実を結んでいった。単に多くのゴルファーが川奈に目を向けるだけではなく、戦前はプロゴルフの選手権や戦後は国際競技の舞台になり、脚光を浴びることが多かった。プロゴルフ界の中枢を担ったプロゴルファーたちも育った。そこでゴルフ史に残る競技の数々を取り上げてみるが、こんな一件もあったのは忘れ難い。昭和9年の2月、来場者の煙草の火の不始末から施設の一部、約9万坪が消失する事件があった。幸いにもクラブハウスや宿泊施設は延焼を免れている。

さて戦前、川奈でのゴルフ競技で脚光を浴びた一つに昭和14年の日本プロゴルフ選手権がある。日中戦争が長引いて戦域が拡大し、戦争の足音が高まり、政府は時局を考慮してゴルフ場の入場者1人に対して1円を課税した。

しかし翌年には東京でのオリンピック開催が予定されていたのでスポーツ熱は高く、ゴルフはこの年、日本アマチュアゴルフ選手権に東大生の原田盛治が優勝し、東西対抗には近衛文隆が登場するなど新進ゴルファーの登場など華やかな話題が多かった。

川奈での日本プロゴルフ選手権は戸田藤一郎が宮本留吉を3アンド2で破って、チャンピオンになり注目された。戸田はこの年に日本プロ、日本オープン、関西オープン、関西プロの4大タイトルを同一年度に手中にして鬼才といわれた。

《写真》
ゴルフの鬼才といわれた名手だった戸田藤一郎



伊豆伊東のゴルフ物語

(39) 大倉の人材育成の一環 ～キャディーの制服に 見るお洒落心

大倉喜七郎の伊東における事業展開の課題の一つに、地元優先の雇用と人育てという問題が横たわっていた。大倉はホテルで働くスタッフもさることながら、ゴルフ場の現場で働く女性キャディーにまで気を配ったのは注目される。

ゴルフ場のキャディーといえば、初期の時代は少年たちのアルバイトが多く、家計の補助役だった。川奈の場合もゴルフ場ができ、収入源の確保は地元民にとっては有難かった。

『川奈にホテルやゴルフ場ができる以前、用地を買収する段階から、大倉は地元民の職場確保を優先する方針を立てていたそうだ』（暖香園・北岡貴人氏）といわれる。

その川奈のゴルフ場で働くキャディーの服装にも、なんでも一流を好む大倉のお洒落心が表われている。競技も一流、コースも一流、だから裏方も一流でなければ、という大倉の方針の表れだったろうか。

川奈の所属プロゴルファーだった陳清水の夫人ふみ子は結婚前、川奈のホテル勤務の経験があるが、大倉のことは『お洒落な、気配りをする方』と話していた。その彼女にはこんな秘話がある。ある日のこと大倉から『君、女子プロゴルファーにならないか』と声を掛けられた。彼女がまだ20歳代になったばかり『女子プロといってもなにをするのか見当もつかないのでお断りをしました』と語っていた。もし、この時点で陳夫人がその気になっていたら、日本のゴルフ史の上、夫君より特記される人物になっていたかも知れない。

《写真》

大倉と洒落た服装のキャディー



伊豆伊東のゴルフ物語

(40) 杉本伊代子の記念碑 ～同僚が建立に一肌

伊東在住、ゴルフ好きの友人、北岡貴人さん（暖香園社長）から『女子プロゴルファーだった杉本伊代子の記念碑が生家の庭に立っているのを知っているかい』と電話が架かってきたことがある。春の桜が綻びかけた頃だった。ゴルフ友達の村山雅春、矢野雄次郎両君と連れ立って、伊東に足を運んだ。川奈の漁港に近い高台の一角に杉本家があり、その庭先に大型テレビ程ほどの大きさの記念碑があった。碑には日本女子プロゴルフ協会一同、有志一同と刻まれていて、建立されたのは平成17年のこと。杉本が他界したのは昭和50年3月22日だから建立は30年後のことだった。いまは女子プロゴルフ隆盛の時代だが、それ以前のことだから、記念碑が立つのは、極めて珍しいといえるだろう。

杉本伊代子は地元の中学を卒業して川奈ゴルフ場でキャディーとして働きだした。

仕事の余暇にボールを打ち始めたのは、ゴルフ場には専属プロの陳清水がいたからだ。陳は伊代子の義理の叔父に当たることから、球を打つ要領を授けた。

その存在が大倉喜七郎の目に止まり、女子プロの道へと道が開けた。

大倉は川奈にゴルフ場を造って以来、女子プロゴルファーを世に送り出すことを考えていた。伊代子は昭和36年に日本の女子プロゴルフがスタートするとこれに参加した。この時分は女子プロとは名乗れずゴルフ場女子従業員の同好会というサークル活動だった。

《写真》

(上) 女子プロ草創期（杉本伊代子前列の左端）

その右上が樋口久子。中央の男性は女子プロ同好会の会長に就任した赤星四郎

(下) 杉本伊代子の記念碑



伊豆伊東のゴルフ物語

(41) 杉本伊代子 川奈のプロに登用 ～女子プロを目指す同好会に参加

杉本伊代子が女子プロゴルファーとして川奈ゴルフ場の専属になったのは昭和31年の1月のことで、20歳の春だった。陳清水の奥さんふみ子によると『伊代子はプロになる以前からアプローチとパッティングがうまく、川奈でのベストスコアは78だった』という。

オーナーの大倉喜七郎は杉本の存在を知り『このままキャディーをやらせておくのは惜しい。プロとして来場者相手にコースでレッスンをやらせよう』と専属プロに迎えた。一方、大倉はプロゴルフ協会に対して杉本をプロとして公認するよう働きかけたが、プロとは男子のみで進展はなかった。

その時代のゴルフ界の背景として女子は奥様ゴルファーの活躍が顕著であったからだ。アマチュアの競技として関東女子選手権が創設されたばかりだから、女子プロの存在なんて眼中にない。

そこで杉本は果たしてプロとして可能かどうか。テストの意味合いも込めて当時、暖香園の北岡家との交流の深かった伊沢鈴子さん（昭和30年の関東女子ゴルフ選手権優勝者）が同伴で川奈コースをプレーすることになった。結果は『18ホールを二人とも78のスコアで回った。そこで杉本はプロとしてOKの太鼓判が押された』（北岡氏談）

その時代は女子プロの組織はなく、杉本は女子プロを目指す20人ほどの同好会に参加して腕を磨いた。

《写真》

伊代子のプレーにプロとしてお墨付きを与えた伊沢夫人



伊豆伊東のゴルフ物語

(42) 女子プロ誕生のきっかけ ～原田経子の松島訪問

鎌倉のゴルフ場でキャディーとして働いていた原田経子（元日本女子プロゴルフ協会員）が、ゴルフショップを経営していた松島杲（こう）三（ぞう）を訪ねたのは、昭和35年の春だった。原田は姉同伴の訪問で、松島にこう切り出した。

『私たちゴルフをしたいのです。だが、キャディーはプロだからアマチュアの試合に出られないのです。どうにかして私たちの出られる競技会をつくりたいので応援してください』

松島は当初、彼女たちが、何故自分を訪ねてきたのかは分からなかったが、よく聞いてみると、ゴルフ場の男子プロやPGA（日本プロゴルフ協会）に聞いても相手にされず、プロの大御所である中村寅吉から『フタバゴルフの松島さんにでも相談してみろ』といわれての訪問だったらしい。しかし松島は突然そう言われてもプロに関する知識もなく適当に対応したが、彼女たちは熱心だった。『同じような希望を持っている女性は何十人もいます』と言葉が続いた。

たまたま同席していたゴルフ専門紙の記者が話を聞いて、『面白いじゃないですか。アメリカには女子のプロゴルフ協会もあるし、女子オープンのようなものをやれば紙面に取り上げられるし、紙面効果で営業成績も上がりますよ』さらに『俺も手伝うから・・・』の言葉と原田の熱意に押されて『応援してみようか』という気になった。

しかし当時の日本の女子ゴルフ界は、女子プロの存在などは眼中になく、松島はアマチュア界の主だったメンバーに意見を聞いてみることにした



《写真》

フタバゴルフ社長時代の松島杲三氏（左）と石井朝夫プロ

伊豆伊東のゴルフ物語

(43) 女子プロの卵の旗揚げ ～従業員ゴルフ大会

鎌倉のゴルフ場で働いていた原田経子（元日本女子プロゴルフ協会員）が、切々と訴えた一件に、心を動かされた松島杲三（フタバゴルフ経営者）は、女子プロを育てようと思った。だが、松島の周囲は『本当に女子プロを育成できるの？』と疑問視する声が強かった。

競技会を開くといっても、キャディーの親睦ゴルフ会程度にしか見られなかった。いざ、月例競技をやるとなると運営費や賞金の工面をしなければならない。優勝者には数万円の賞金が必要だ。松島は先ず競技会の開催を決めた。昭和36年の4月のこと。会場は東雲G C。東京湾の埋め立て地にあった18ホールの子員制のゴルフ場だった。いまはこの一帯は有明テニスの森公園となり、2020年の東京オリンピックではテニス会場になる。旧東雲G Cは昭和27年に開場したが、56年に閉鎖されて、いまは栃木県に移転している。

さて、松島氏の発案で実施された女子プロの卵たちのゴルフ大会は、当初『全日本ゴルフ場女子従業員選手権大会』という名称だった。集った競技者は28人。ゴルフ場やゴルフ練習場で働いている若い女性たちだった。競技は27ホールストロークプレー。当時はプロとは名乗らず、あえてゴルフ場女子従業員ゴルフ大会としたのは、プロとして通用するような腕前ではなかったからだ。競技は二瓶綾子がプレーオフになり、二瓶は杉本伊代子を降した。

《写真》

現在の有明テニスの森公園



伊豆伊東のゴルフ物語

(44) 同好会の費用捻出に苦慮 ～女子プロは余計な風潮

日本の女子プロに関わる初の競技は、全国のゴルフ場女子従業員ゴルフ大会として昭和36年春に、東京・東雲のゴルフ場で開催されたが、集まったのはゴルフ場や練習場で働く若い女性たちだった。

主な顔ぶれは二瓶綾子（府中～元日本女子プロゴルフ協会長）、杉本伊代子（川奈）、坂本美代子（城陽）、大場藤子（東雲）、新井敬子（浮間）、長倉ふく江（山王）、樋口明子（砧～樋口久子の姉）、杉本幸子（川奈）、原田経子（横浜）らだった。

元日本女子プロゴルフ協会長の二瓶綾子は『昭和36年当時、私は府中ゴルフクラブにいました。24歳の時で、師匠のプロである石井朝夫さんから行ってこいといわれて競技に参加しました』と昔を語っている。

このゴルフ大会をきっかけに、ゴルフ場女子従業員ゴルフ同好会は群馬、栃木の借りられるゴルフ場を転々として研修会を開いて研鑽を積んだ。女子プロの卵たちとはいえ、技量は未熟、スポンサーもつかず費用の捻出に苦慮した。経費は松島が会社の金を持ち出していた。会社の経理からは『会社を倒産させるのか』と詰め寄られる始末だった。

その頃、女子プロの出現は、ゴルフ界にとっては画期的なことだが、一方では余計なことと見る風潮があった。この動きが日本ゴルフ協会で副会長・野村駿吉の目にとまり、応援しようという動きになった。それまでは松島が会長職、推進役を兼ねていたが、大物の参入で、会長職を赤星に譲り、松島は運営役に徹した。昭和37年のことだった。

《写真》

赤星会長を中心に記念撮影した当時のメンバーたち



伊豆伊東のゴルフ物語

(45) 同好会の内紛解決に三好氏が動く ～組織の分裂騒ぎ後にプロを名乗る

昭和36年4月に発足したゴルフ場女子従業員のプロを目指す28人のサークルは、松島杲三（フタバゴルフショップ経営者）の肝いりで順調な滑り出しを見せた。毎月、関東周辺のゴルフ場で合宿練習や競技会を開いて腕を磨いていた。ところがある日のこと、メンバーの中から運営に関して不満の声が出た。

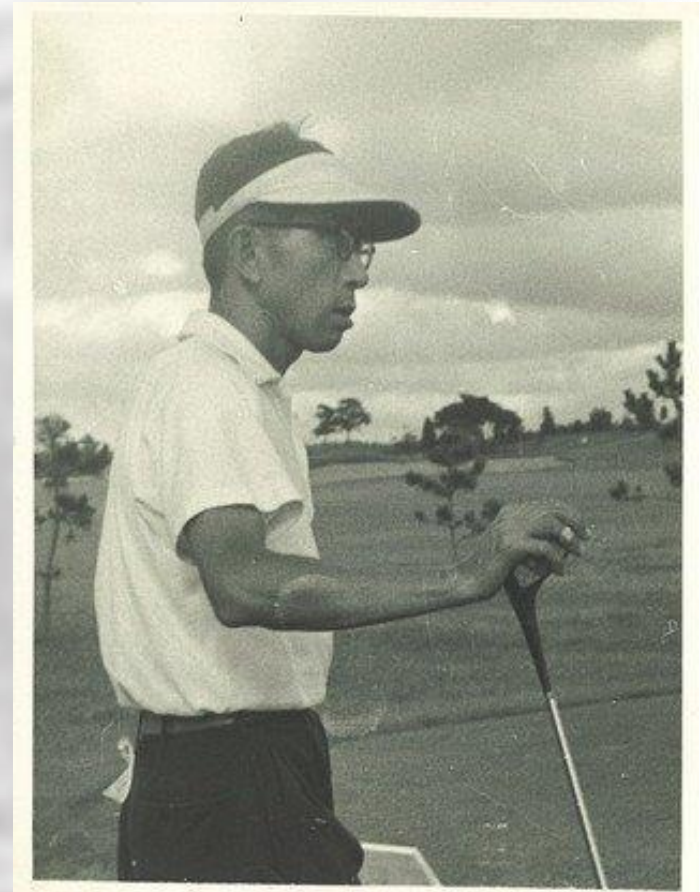
『賞金が安い』（月例競技の優勝者は5万円）とか、『主宰者松島のワンマンぶりと組織の私物化に不満がある』という内容で、18人の脱会者が出た。昭和38年8月のこと。当時の新聞報道では脱会者は新井敬子以下清水和子、杉本伊代子姉妹、二瓶綾子らで8月21日、銀座で記者会見を開き、現在のやり方ではプロとしての発展性に乏しい、と訴えた。一方の松島側は『脱会是一部の者の策謀に過ぎない。誤解続きの内紛だ』と反論して、同好会は二派に分裂した。

しばらくして、内紛解決にアマチュアゴルフ界の大御所の三好徳行が動いた。三好は女子プロ協会の相談役で『組織が二つに分かれていては、ゴルフ界から相手にされなくなる』と切り出して松島を説得した。松島は説得に応じ『今後は自主的に運営してもらいたい』と同意して脱会組を無条件で復帰させた。

亡き杉本伊代子は『松島さんからみんなで自主的にやって欲しいといわれ誤解が解けました。今後はレッスン、競技面で強化を図ります』と語っていた。昭和42年6月、関東プロゴルフ協会内に女子プロ部が設置された。晴れてプロという文言を使えるようになった。樋口久子の師匠、中村寅吉が部会長に就任した。

《写真》

女子プロの内紛解決に動いた三好徳行氏



伊豆伊東のゴルフ物語

(46) 内紛解決から ～日本女子プロゴルフ協会の船出

日本の女子プロ誕生までの前段階には様々なトラブルがあったが、ゴルフ界では女子プロが必要と認知されて彼女たちの存在が日の目を見た。男子プロの組織である関東プロゴルフ協会が女子部を設置し、晴れて女子プロと名乗れることが大きかった。トラブルによって二分化されていた組織は昭和43年には一本化され、日本女子プロゴルフ協会として発足する日を迎えた。発表は帝国ホテルで行われ、二派の仲介に立ったのは当時の富士資材(株)、坂田正道氏だった。女子プロゴルフ協会の会長には以前から関わり合いの深かった中村寅吉が選ばれた。

会員は総勢43人で、昭和49年には現在の女子プロ協会として自主運営に入ったのだ。いまは小林浩美会長以下総勢約1170人、競技数は39。賞金総額は38億円、順風満帆な活動を続けている。

だが、草創期の一時期、分裂騒ぎで世間を騒がせる一幕があったのは陰の部分の出来事だ。知る人ぞ知る歴史の一ページだ。

女子プロの誕生に力となった松島杲三は10年前、94歳で生涯の幕を閉じた。女子プロ協会の立ち上げに夢と希望をもってこの社会に飛び込んだ卵たちの中には他界したプロもいる。年齢的なハンディを背負って退会したプロもいる。

昭和43年の11月、東京放送関連会社の越谷のゴルフ場にスポットを当てようと企画されたのがTBS女子オープンゴルフ（日本ゴルフ協会JGA協賛）だった。当時、日本の女子ゴルフ界は奥様ゴルファーの全盛時代で、女子プロといっても軽く見られたが、中村寅吉の秘蔵っ子の樋口久子（当時美津濃）が142打で優勝してプロの面目を保った。

《写真》

TBS女子オープンゴルフの会場



伊豆伊東のゴルフ物語

(47) 東京放送の女子オープンゴルフ ～プロの面目を保った 樋口久子の優勝

女子プロゴルフ競技の走りは、昭和43年に創始されたTBS女子オープンゴルフである。日本ゴルフ協会はいつの間にか、TBS主催の競技を自分のものに組み入れてしまっている。主催はあくまでも東京放送で、日本ゴルフ協会は協賛だったはず。

TBSが創始した頃の女子ゴルフ界は、上流階級の婦人連が強く、女子プロの存在感はなかった。TBSが女子プロの競技を創始するといっても、ゴルフ界は問題にしなかった。しかし、女子アマチュア界のリーダーだった三井栄子さんらの上層部は、いずれは女子プロの存在は必要という意見を持っていた。

女子プロの競技開催に熱を上げていたのはTBS会長の今道潤三さん。ゴルフ愛好家だった。ある日、幹部会議の席上で『女子ゴルフをやる』と断言した。当時、運動部や総務部に在籍しゴルフ体験者たちは『女子プロの競技といってもアマチュアに勝てない』という見解を持っていた。

コースは河川敷のTBS越谷。河川の土手にテレビカメラを走らせ、プレーヤーを追う中継を強調していた。

競技は12月の寒い日に行われ、優勝を狙う一番手に樋口久子が挙げられた。アマチュア勢は清元登子が注目されたが、2日間、54ホールの競技で争われ、樋口が148打で優勝した。アマチュアの清元は160打でベストアマに輝いた。清元は当時、パワーのあるロングヒッターで注目されたが樋口から12打の遅れで4位タイ。中村寅吉の秘蔵っ子で女子プロの面目を保ったが、この勝利は女子プロにとって価値あるものだった。



《写真》

TBS女子オープンゴルフに優勝し今道会長からカップを受ける樋口さん

伊豆伊東のゴルフ物語

(48) 関東女子ゴルフ選手権始まる ～初代チャンピオンは伊沢鈴子夫人

日本は太平洋戦争に敗れ、戦後の混乱、食糧難の時代から脱却できたのは昭和20年代の半ばである。プロ野球は赤バットの川上、青バットの天下が人気者になり、アマチュア野球は東京六大学野球が大勢の観客を集めた。ゴルフはアマチュアの全盛期で、日本に駐留した米軍のお陰で芋畑になっていたコースの復元は早かった。

昭和24年には日本プロ選手権が我孫子ゴルフ倶楽部で開かれ、林由郎が優勝した。アマチュアはその年の秋に日本ゴルフ協会が復活し、翌年度事業として日本アマチュア選手権などの開催を決め、ルールは米国のものを採用することになった。

日本に駐留した米軍の影響などもあり、婦人連のゴルフ熱は高まった。戦前からクラブを振っていた婦人方、戦後仲間入りした新旧の婦人ゴルファーたちがせっせとゴルフ場通いをした。

ゴルファーが増えれば競技を開きたくなるのはスポーツの世界では当然のことで昭和30年には関東ゴルフ連盟が関東女子ゴルフ選手権を創設した。その第1回大会は同年6月2・3日の2日間、千葉県の大井町カンツリー倶楽部で開かれ、参加者は26人だった。カンツリー倶楽部の会員だった伊沢鈴子夫人が36ホールのプレーで175（85・90）のスコアでチャンピオンになった。この伊沢夫人は日本における女子プロ第1号になった杉本伊代子と川奈子コースでプレーし、杉本のプロとしての素養に合格の太鼓判を押した女流ゴルファーである。

《写真》
伊沢鈴子



伊豆伊東のゴルフ物語

(49) 関東女子ゴルフに女優さんが勝った ～新東宝映画のスターだった 荒川さつきさん

荒川さつきといっても知る人は少なからう。戦後間もなくの銀幕のスターだった。鎌倉在住の文士（久米正雄などの文化人）の発案による『鎌倉カーニバル』というミスコンテストが開かれ、ミス・カーニバルに選ばれた人物だった。このコンテストの委員会から推されて新東宝映画の女優になり、多くの映画に出演した。

その頃の荒川は趣味としてゴルフを始め、多くの財界のお歴々とプレーをした経験がある。その間、アメリカに渡りゴルフの腕前に磨きをかけ、相模カンツリー倶楽部に入会してコース通いに熱を挙げた。

関東の女子ゴルフ選手権が創始されたのは昭和30年のこと。荒川は第1回大会から出場して、アメリカで磨いた腕を試した。第1回目の選手権は伊沢鈴子が優勝し、荒川は10打離されて3位タイ。当時の荒川は本名の吉田五月でプレーしていたから、周囲に女優さんとは気づかれなかったようだ。しかし第2回の競技会が昭和31年の10月、小金井カントリー倶楽部で開かれた。荒川はマッチプレーであれよあれよという間に勝ち進み、ベテランの西邑敦子と優勝を争った。秋雨が降り続き、両者はびしょ濡れで戦い、荒川は5アンド4で初優勝した。この時、荒川さつきの芸名で出場したため、女優さんがゴルフ大会に勝った、と大騒ぎになり、写真入りの記事で新聞の運動面を飾った。この時、運動部のデスクがいうには『普通の人なら記事にならない。女優さんなら見出しを大きく』と大声で指示した。

《写真》

荒川さつきのプレー／関東ゴルフ連盟機関誌より



伊豆伊東のゴルフ物語

(50) 川奈の36ホールが日本のゴルフ界に与えた影響

川奈ホテル36ホールのゴルフ場は今日に至るまで、日本のゴルフ発展のために大きな影響を与えている。それを紐解いてみる。川奈を創った大倉喜七郎の根底に流れていたゴルフ場造りの理念は『趣味でも、道楽でもない。外国人客を伊豆に誘致するため』（大倉の談話）というところだったようだ。

今日、観光の振興に力を入れるニッポンは、海外からの観光客の誘致に力を入れているが、大倉は80年も昔に観光開発を呼び掛けていた。一方ではゴルフを通して文化人の交流に熱心で、音楽、文士たちのゴルフの集いは言うに及ばず、プロゴルフの発展に力を入れている。

その大倉の趣味は音楽であることはつとに有名だが、昭和10年7月のこと、音楽関係者を中心に大倉の支援で『楽団ゴルフ倶楽部』が発足した。メンバーはビクターの社長、岡庄五。コロンビアの関係から作家の久米正雄、音楽関係者は近衛秀麿、オペラの藤原義江、太田黒養二ら。さらにゴルフ界から大谷光明、赤星四郎、野村駿吉、鍋島直康といった顔ぶれが集い、名誉会長に大倉が就任し、倶楽部は発会に際しゴルフ大会の開催やゴルフを通して音楽界の発展に寄与することを申し合わせた。

倶楽部の名誉会長に収まった大倉は、自ら開発したというオークラウロという管楽器を奏でていた。この楽器は尺八を洋風化したような楽器で大倉が吹き、バイオリスト巖本真理らと四重奏を楽しんでいた。「大和楽」という新しい種目の邦楽を創造するほど、音楽に造詣が深かった。

《写真》

コースに立った大倉喜七郎と近衛文麿（中）と入江徳郎



伊豆伊東のゴルフ物語

(51) 半分のカップの会 ～大倉流のユーモアで 藤原義江を表彰

大倉喜七郎のバックアップで誕生した音楽関係者が集う『楽団ゴルフ倶楽部』の第1回競技会が昭和10年の7月、川奈リンクスで開かれた。人気者の名テナー藤原義江が健闘して前半を38というスコアで回った。優勝間違いなしと見られていたが、後半は58も叩いて優勝から見放された。藤原に同情したのは大倉で、趣向を凝らした“藤原の38を称える半分カップの会”を東京で開いた。

宴会場の広間は半分に仕切られ、テーブルも半分の三日月型。料理の盛り付けも半分。注がれるビールも半分。参列者が祝辞を述べると半分でストップの声がかかった。笑い声は『ワッハハハ・・・』ではなく『ワッハ』で終わりとなる。

この日、会の司会役は無声映画の弁士で有名な松井翠声が担当した。上半分は洋装で下は袴といういで立ちだった。

ゴルフ界から大谷光明、鍋島直泰、野村駿吉、赤星四郎、岡庄五という重鎮が出席した。参列者の一人はコップ半分のビールを指してボーイに『誰かの飲みかけではないか』と怒ると、出されたお茶も半分だった。

かくして大倉のユーモアたっぷりの宴会が終盤になると、大倉は半分のカップを藤原に、残る半분을あき夫人に渡しながら『ベターハーフは夫人へ』と声を掛けた。あき夫人はこの時、奇しくも38歳だった。

終宴の挨拶で大倉は『私はゴルフの練習はプロに教わってやっています。プロがいうには、前半のバックスウィングは大変良いそうです。後半のダウンスウィングのことをお知らせしたいのですが、今晚はなんでも半分だそうで、お話できないのが残念です』と巧みな落ちで締めくくった。

《写真》

半分の会で藤原夫妻に囲まれる大倉喜七郎（中央）



伊豆伊東のゴルフ物語

(52) 井口貞夫とカナダ・カップゴルフ ～ホプキンスに参加要請が実る

1953（昭和28）年、イギリスのエリザベス女王の戴冠式がロンドンで行われ、日本から当時皇太子（平成天皇）が天皇（昭和天皇）のご名代として参列された…皇太子は空路アメリカ経由でイギリスに向かわれたが、道中アメリカ本土のみならず、カナダに立ち寄られ、原子力潜水艦ノーチラスの建造で知られるジェネラル・ダイナミックス社を訪問された。

皇太子のお伴は駐カナダの日本大使だった井口貞夫（後に駐アメリカ大使、和歌山県出身）だった。ジェネラル・ダイナミックス社の会長はジョン・ホプキンスで、カナダ・カップ（現ワールドカップ）ゴルフの創始者だった。ホプキンスはゴルフ愛好家で、ゴルフを通じて世界各国の友好親善を唱えていた。

カナダ・カップの創始は1953年、第1回大会はカナダで開催された。競技は1国から2名が出場し、72ホールをプレーしてその合計で優勝を争った。当時、日本は敗戦国で、スポーツの国際競技には呼び声がかからなかった。

さて、皇太子のお伴でジェネラル・ダイナミックス社を訪れた井口は、ホプキンスと懇談の機会があり、ゴルフ談義に花を咲かせた。席上、井口は日本のゴルフ事情として、ゴルフの普及ぶりを伝え、カナダ・カップに日本参加を訴えた。ホプキンスは即座に『来年から日本にも招待状を送りましょう』と快諾し、日本の参加が実現した。第2回の大会はモンリオールで開かれ、中村寅吉と川奈出身の石井迪夫が参加した。

井口は晩年、東京ゴルフ倶楽部の会報に原稿を寄せ、カナダ・カップに思いを馳せていた。井口はその後、駐米大使に転じたが、ワシントンで日本勢の応援に駆け付けて小野光一、栗原甲子男の日本ペアを激励している。皇太子のカナダ訪問に絡んだゴルフの国際競技進出の裏話は余り語られていない。

《写真》

日本のペアを激励する井口大使

（写真中央と左は栗原甲子男右は小野光一）





(53) ホプキンスの日本訪問 ～カナダカップ日本開催が決定的に

カナダカップといっても、現代のゴルファーには馴染みが薄いかもしれない。カナダカップは昭和28年に創始された国別対抗戦のゴルフ競技で、昭和32年、同41、平成13年の計3回、日本で開催されている。そのうち日本は2度優勝しているが、日本のゴルフ史を紐解くと、最初の昭和32年の大会が古いゴルファーには一番印象に残っているようだ。この年の大会は埼玉県霞ヶ関カンツリー倶楽部東コースで開催され、地元の日本は中村寅吉、小野光一のペアで優勝し、日本のゴルフが脚光を浴びて普及に拍車がかかった。

それ以前の日本のゴルフ界では国際競技の開催はなく、主催者グループの一員だった日本テレビ放送網が画期的な実況中継をした。そのおかげでゴルフというスポーツが茶の間に飛び込み、多くの国民はゴルフを知った。それ以前は一部の特権階級の遊びで、内容に対しての知識は薄かった。

そのカナダカップを創始したカナダのジェネラル・ダイナミック社のジョン・ホプキンスは昭和30年、当時の読売新聞社主・正力松太郎の招きで来日し同年5月19日に伊東を訪れ、川奈ホテルに滞在して翌日、ゴルフを楽しんでいる。コーディネートしたのは日本ゴルフ協会の理事だった小寺西二で、カナダカップの日本開催を働きかけた。正力の招聘とJGAの対応の熱意が実り日本開催が決まって昭和32年正月の読売新聞は一面の社告で『カナダカップ日本開催』を告知し、原子力の平和利用を強調した。日本政府は原子力の導入に熱心で、衆議院における原子力発電導入を検討する委員会の委員長が中曽根康弘だった。

《写真》

- (上) ホプキンスの川奈滞在中にコーディネート役を果たした小寺西二のゴルフ
(下) 川奈をプレー中のホプキンス



伊豆伊東のゴルフ物語

(54) カナダカップ日本開催の前年 ～林、石井のペアが4位タイの健闘

カナダカップゴルフの日本開催は昭和32年の秋のことだが、この大会開催に日本のゴルフ界が異常なまでに関心を寄せたのは、その前年に日本のペアが団体が4位タイという好成績を残したからだ。日本のペア林由郎（我孫子）と石井迪夫（芦屋・富戸出身）がゴルフ発祥の地、英国のロンドン郊外にあるウエントワースで行われた大会で、あっと驚く成績を残した。

日本はこれまでに3度出場したが、いずれも成績は芳しくなかった。敗戦から日も浅く、ゴルフの普及は未だしという状況だったせいか、昭和29年に初参加以来、ベスト10はおろか、20位どころを低迷していた。だから日本開催といっても多くを期待する声は聞かれなかった。

ところが日本開催の前年、6月26日早朝のことだ。外国通信社（AP通信など）が日本のカナダカップでの大健闘を伝えてきた。内容は林由郎と石井迪夫のペアが大健闘して4位タイ。しかも日本のペアは最終日にそろって69をマークしたと伝えてきた。この69は優勝したアメリカのペア、ベン・ホーガン、サム・スニードが出した69と同スコアということが大きな反響を呼んだ。

かくして日本のペアの大健闘！と各紙は夕刊で大きく報道したことで、カナダカップへの期待感が膨らんだ。

その時代、日本のゴルフ競技は、日本ゴルフ協会、関東・関西のゴルフ連盟が主催するアマチュアの競技が主流で、プロの競技は、日本、関東関西のオープン選手権が注目される程度だった。読売新聞社が『百万円賞金プロゴルフ選手権』を昭和27年に開催したが、『ワンパット20万円のスリル』という売り言葉が話題になり、このキャッチフレーズは、プロゴルフの競技がようやく脚光を浴びるきっかけになったのは確かだ、昭和32年秋、『原子力の平和利用』を売り言葉に第5回のカナダカップを迎えることになった。



《写真》

『1956年のカナダカップで日本が4位タイと大健闘した時』 左端が林由郎、右端は石井迪夫（ロンドン・ウエントワースで）

伊豆伊東のゴルフ物語

(55) カナダカップの報道陣取材に 小寺の規則、競技方法の解説

昭和32年の正月、カナダカップを主催する読売新聞が社告で“原子力の平和利用”をキャッチフレーズのカナダカップの日本開催を伝えたら、大きな反響を呼んだ。世界一流のゴルファーのプレーが目の前で見られる。ゴルフがようやく普及の道を歩き出した頃だから観戦を希望するゴルファーの声があちこちから聞かれた。

しかし困ったことに報道する新聞各社にはゴルフの記事を書ける記者がいない。プロ野球、東京六大学の記事はお手のものだが、ゴルフとなると経験者がいないから無理からぬことだった。慌ててゴルフを履修せよ、というデスクからの声が飛んだが、ゴルフは一朝一夕にして身につくものではない。各社思案投げ首の状態だった。

そこへ救世主の登場となる。日本ゴルフ協会の役員だった小寺西二（1897～1976）が大会前、ゴルフの普及、発展を見据え、ゴルフ界の指導者的な立場から、取材する記者団を相手にゴルフの講義をすることになった。講義は『パーとは・・・』『バーディとは・・・』に始まり、規則や技術論にまで及んだ。この結果、記者団の取材は円滑に進められ、日本のペア（中村寅吉、小野光一）の歴史に残る快挙を報道できた。日本テレビが史上初の中継放送を行い、その電波が茶の間に入り、多くの視聴者はゴルフを知ることができ、普及への拍車がかかった。

小寺の適切なゴルフ講義に感謝の意味で記者クラブ有志はポケットマネーを叩いて記念のトロフィーを作り、小寺に贈った。

《写真》

小寺に記者団が贈った記念のトロフィー



伊豆伊東のゴルフ物語

(56) カナダカップに日本が優勝 ～ゴルフの普及に拍車

1957(昭和32)年頃、脚光を浴びたスポーツは東京六大学野球、プロ野球は日本シリーズでの水原(巨人)、鶴岡(南海)の対決などだが、ゴルフはカナダカップの日本開催が決まり、巷ではゴルフを話題にする機会が増えた。日本勢は果たしてどの程度戦えるか、に集中した。なにせゴルフ王国のアメリカから名手サム・スニードら世界的に知れた名手がやって来るというのだから例え地元とはいえ歯が立つまいというのが世間の下馬評だった。

この年の10月24日、霞ヶ関CC東コースに30ヵ国60人が参加して4日間、72ホールのストロークプレーが開幕した。日本代表は中村寅吉、小野光一。第1日はアメリカが通算136打でリードしたが、ところが日本勢は2日目首位に立ち、一度も首位を譲ることなく合計557打で次位アメリカに9打の差をつけて優勝した。中村は個人戦でも通算274というスコア(14アンダーパー)でこの回から実施された個人戦にも勝った。

このカナダカップは日本のゴルフ史上初めて行われた国際競技で、日本の若い女性キャディーの献身的な働きが国際的な話題になった。

名手スニードを担当したのは金子くらさん(旧姓川目)。霞ヶ関CCのハウスキャディーだが、スニードは当初女性キャディーを拒否した。しかし彼女が自分の体ほど大きいバッグを軽々と担ぐのを見て安心したらしく『ナンシー』とニックネームで呼び彼女に全幅の信頼を寄せ、最後は『キャディバッグに入れてアメリカに連れて帰りたい』といわせたほどの逸話が残る。

《写真》

(上) カナダカップの第一日、中村寅吉の第1打

(下) カナダカップ優勝の中村寅吉左/小野光一右



伊豆伊東のゴルフ物語

(57) カナダカップでゴルフの普及 ～象徴は砧パブリックコース

カナダカップで日本代表の中村寅吉・小野光一のペアの優勝は、全く予想すらできなかった快挙であったのみならず、テレビ中継がなされたために電波が各家庭に入り込んだ。その影響で巷のゴルフ熱が高まったのは事実である。各階層別に眺めてみると、中小企業の経営者が熱心で、ついで各家庭の主婦たちは言うに及ばず、水商売の女性たちの進出が目立った。

隆盛を物語るのは砧（東京都世田谷区）にできた9ホールのパブリックコースであろう。このゴルフ場は世田谷区の平坦な緑地に1955（昭和30）年12月、東京都の所有地に東急電鉄が委託を受けて造ったコースで、1962（昭和37）年にはゴルフ場としてはめずらしいナイター設備ができた。

特筆すべきはゴルフ界、財界の名士がコースの設計を担当したことである。井上匡四郎（鉄道大臣）、小池厚之助（山一証券社長）、五島昇（東急電鉄社長）、石坂泰三（東芝社長）、鍋島直康（侯爵）、長野重雄（日本鋼管社長）、三井栄子（女流ゴルファー）、平山孝（運輸次官）、三好徳行（日本アマ三連勝）の諸氏がそれぞれ1ホールを担当した。

大衆的だったのは料金設定だろう。当時サラリーマンの平均的な月収は3万から5万円。コースの料金はグリーンフィーが550円、キャディーフィーは120円、諸経費込みで1000円もあればお釣りがきた。

開場早々から人気があり、プレーのスタートは到着順だったことから午前3時には来場者が並ぶという盛況で、しかも、専属プロにカナダカップの優勝者、中村を迎えた。ナイター設備ができたものの、ボール探しに骨が折れた。1966（昭和41）年、東京都民の『ゴルフ場を廃止して緑地を求められた』ことからコースは姿を消した。現在は東京・世田谷区にある緑地公園になっている。

《写真》

中村・小野のカナダカップ優勝





(58) カナダカップで評判になった ～日本の女性キャディー

1957（昭和32）年のカナダカップで大きな話題になったのは女性のキャディーの働きと高麗芝のグリーンだった。以前、ゴルフの神様サム・スニードを担当した若い女性キャディーが献身的な働きで彼を支えたが、神様は痛く感動したらしく、その後の来日の際、彼女にゴルフセットを贈った。日本では元来、ゴルフ場のキャディーといえば少年のアルバイトだった。

ところが戦時中、若者は兵役に服したため人手不足に陥り、少女キャディーの登場となった。戦後、ゴルフが普及してその習慣は続き、キャディーは女性の副業となり、川奈の女性キャディーの存在はゴルフ界の名物だった。

日本では若い女性キャディーにはプロの道も開けている。女子プロの草創期にはキャディー経験者が多かったが、いまは高校や大学のゴルフ部でゴルフを経験したプロが多く、キャディー出身者は少ないようだ。

日本の女性キャディーが有名になったのはカナダカップにおける金子くらさん（霞ヶ関CC）のような献身的な働きにあるが、東京・八王子にある武蔵野ゴルフクラブのキャディーの諸嬢は米西海岸で行われていた喜劇役者のボブ・ホープが主催する競技の余興として5人のキャディーが招かれ、競技の余興としてバッグを肩に担いでコースを歩いたことがあり、こちらも有名になった。アイルランドのプロC・オコンナーはカナダカップで出会った女性キャディーの存在が印象に残っているらしく、日本の女性キャディーの存在を吹聴していた。日本の女性の優しさ、たくましさを物語る一例だろうか。



《写真》
武蔵野GCキャディの海外遠征

伊豆伊東のゴルフ物語

(59) 高麗芝のグリーン ～日本のゴルフ場独特の芝

カナダカップで日本が初優勝でき、国内の普及に拍車がかかった陰には、日本独特の高麗芝のグリーンがある。事実、競技において外国のプロたちは、一様に短い距離のパットに苦しんだ。芝目が強いから短いパットといえども気が抜けない。海外におけるコースのグリーンは、芝目の弱い、常緑のベントが主流だったからだ。

日本のゴルフ場は昨今、グリーン芝は西洋芝（ベント芝）を採用しているところが多いが、実はこの種の芝は管理に高額な費用が掛かる。高麗芝の3倍といわれるが、これがプレー費に重くのしかかっているようだ。だから日本のゴルフ場のプレー費は安くない。カナダカップで中村寅吉が短いパットを無難に沈められたのは、日本の高麗芝育ち故の技術が生きた。

なぜ、ベント芝が流行ったか。時代は終戦直後に遡るが日本のゴルフ場を接収した米軍のゴルフファーマたちは休眠して黄色に変色する高麗芝のグリーンを敬遠した。そこで西洋芝の種子を輸入して育て、本グリーン（高麗芝）の手前に特設の小さなグリーンを造った。この常緑芝は改良を重ね、やがて冬休眠する高麗芝に代わって主役の座についた。ベント芝は表面が柔らかく、ボールの転がりがスムーズで、落下したボールがよく止まる。新しいゴルファーは高麗芝のグリーンを知らない。ベント芝が本流と思い込んでいるようだ。

カナダカップに話を戻すが、会場の設定で大きな問題だったのは高麗芝だ。グリーンの設定が問題だったが、そこに賢者、小寺西二（日本ゴルフ協会常任理事）の登場となる。

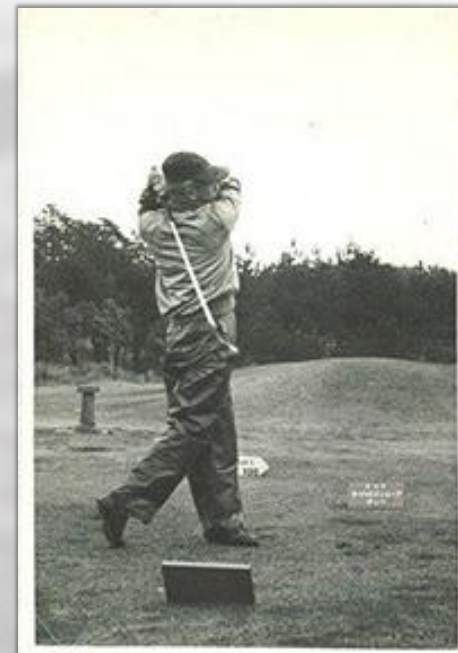
『日本には日本の独特の芝がある。それは高麗芝のグリーンだ！』

カナダカップ優勝の裏には、高麗芝の味方があった。

《写真》

（上）霞ヶ関C C18番の高麗芝のグリーンと小寺西二氏

（下）カナダカップ日本優勝の瞬間を見守る観衆と中村（右）と小野（左）



伊豆伊東のゴルフ物語

(60) ゴルフの神さまがやって来た

1957（昭和32）年10月のカナダカップ開催を前に、日本のゴルフ界は名手サム・スニードやゲーリー・プレーヤーがどんなプレーをするのか、が話題の中心だった。さらにこの大会がいかに世界的に注目されていたか。それを物語るのには大会取材のためにアメリカからやって来た著名なジャーナリストたちだ。AP通信社運動部長のウイル・グリムムスリーがやってきた。

H・W・ウィンドというベン・ホーガンの『モダン・ゴルフ』の著者らの取材来日で、世界的なイベントというムードが高まった。海外からのプロたち60人は東京・帝国ホテルに宿泊し、大会三日前の練習日からバスでゴルフ場入りした。

受け入れる側の霞ヶ関CCは中村支配人以下、倶楽部の職員は総動員で、経験豊富なキャディーを他倶楽部からの応援派遣を仰いだ。

大会前、報道陣は『明日開幕』の取材に追われ、予先はスニードや地元の中村寅吉に向いた。ところがお目当ての二人は捕まらない。それもそのはず。スニードはお隣のゴルフ場、東京ゴルフ倶楽部にパートナーのジミー・ディマレーと同倶楽部の会員、中野敏雄さんに招かれて会員との交流の会に出向いていた。

練習場でデモンストレーションをやり記念撮影に応じた。

東京ゴルフ倶楽部の居合わせた会員は予期せぬ大物の訪問に大喜びだった。

一方の中村寅吉はコースには姿を見せず、関係者は練習もしないで・・・

とやきもき。薄暗くなってから倶楽部に姿を見せたが、好きな釣りで気分の一新を図っていたようだ。事故もなく一同『やれやれ』だったが、この釣りは中村にとっては休養と気分一新の効果があつたらしい。地元という重圧を跳ね返し、カナダカップ本番第1日は4アンダーパーの68で回り2位の座を確保して優勝への足掛かりを掴んだが、大会前にこんな一幕があった。

《写真》

東京ゴルフ倶楽部を訪れたサム・スニード（左） 背後は旧東京ゴルフ倶楽部のクラブハウス



伊豆伊東のゴルフ物語

(61) 大倉・野村の友情から実現した ～世界アマチュアチーム選手権

大倉喜七郎は実業家で川奈ホテルのオーナー。一方の野村駿吉は日本ゴルフ協会の副会長で、戦後日本の、ゴルフの国際化における推進役を担った。ともに同世代に生きた日本を代表するビジネスマンで、両者の交流は若い時代から続き、野村は川奈ホテルのご常連客だった。

ゴルフの国際化に熱心だった野村は、当初、アマチュアの日米対抗を思い立った。だが、米国側がこれを受けず、1958（昭和33）年秋の世界アマチュアゴルフチーム選手権大会に変わった。第1回大会はゴルフ発祥の地スコットランドで、第2回大会は米国、そして第3回大会は日本開催となり、会場を川奈とすべく野村は親友の大倉に相談を持ち掛けた。

ゴルフの世界アマチーム選手権の開催要項は、オリンピックと同じで、同じ宿舎に泊まり、同じ食事を楽しみ、友好を深めることをモットーとしている。開催場所としてホテル、ゴルフコース提供の要請を受けた大倉は即座に了承し、1962（昭和37）年の秋、川奈富士コースで開催された。優勝はアメリカ。地元の日本は中部銀次郎、石本喜義、鍋島直要、広瀬義兼という当時日本のアマチュア界を代表するメンバーが出場して5位の成績を収めた。この国際競技は1957（昭和32）年のカナダカップに次ぐ大規模な国際大会で、関東、関西はもとより全国のゴルフクラブが支援した。各地から大会を支援するキャディーさんが集まり、大会を盛り上げた。アメリカチームはディーン・ピーマンがいた。後に米プロ協会のコミッショナーを務めた。プロになったリチャード・サイクスもいた。グリーンの傾斜を読む際、パターを目の前で吊るす独特の芝読みのスタイルが話題になった。日本のゴルフ界でもこのスタイルを真似るゴルファーが続出し、サイクス流の芝読み術と話題になった。

《写真》

（上）第3回世界アマチーム選手権の大会の表彰式：アイゼンハワーがトロフィーの授与

（下）川奈ホテルの会議室で懇談する野村駿吉氏ジョセフ・ダイ氏（USGA セクレタリー）



伊豆伊東のゴルフ物語

(62) カップを持たない日本オープンのチャンピオン

1952（昭和27）年といえば、日本のゴルフがようやく復興の兆しが見え、戦時中に解散していた日本ゴルフ協会が復活して、競技会を開催する力が付いた時分だ。戦時中、畑になっていたゴルフ場のほとんどは日本に進駐した米軍に接収され、会員といえども容易にプレーはできなかった。川奈のゴルフ場は連合国軍の保養所になっていたためコースはプレーできる状態に保たれていたようだ。

そこで復興した日本ゴルフ協会は日本オープン選手権の会場に川奈を選んだ。

優勝者に授与するカップも新調し、戦後3度目の大会を富士コースで10月8日～10日に開催した。中村寅吉とホームコースの石井茂が健闘して優勝争いを演じたが、中村が通算279打で終盤独走した。中村にとっては初の優勝だった。

さて、競技が終わり表彰式になったが、秋の日暮れは早い。困ったのはカメラマンたちであった。カップを持った中村の写真が欲しい。今の時代と違ってフラッシュの装備は完全ではないから、暗くなると写真は撮れない。そこで報道陣と協会側の交渉が始まった。報道陣は明るいうちに優勝カップを持った中村の写真を撮りたい、と要求した。困ったのは協会側で、カップを授与する前だから、それは困ると拒否した。そこで協会側の賢者がこんな提案をした。カップ授与前だから優勝者の横にカップを置いて撮影すれば、というのである。そこで川奈ゴルフのクラブハウス横で撮影したのがカップを持たない優勝者の写真である。いまはフラッシュが装備されているから、初心者でもきれいな写真が撮れる。科学の進歩は恐ろしいものだ。

《写真》

カップを持たない優勝者の中村寅吉



伊豆伊東のゴルフ物語

(63) わかな会ゴルフ大会 ～きっかけは世界アマチュア・ チーム選手権の開催

川奈をあえて『わかな』と言い換え、わかな会として、定期的に川奈のコースでゴルフを楽しむ同好の士の集いがあった。

リーダーは日本ゴルフ協会の会長を歴任した石井光次郎さん。会が誕生する経緯は1962（昭和37）年の第3回世界アマチュア・チーム選手権が川奈コースで開催されたところにある。主催した日本ゴルフ協会は会長の石井さんを筆頭に副会長の野村駿吉さんらが、英語に堪能なスタッフを集めて日本のゴルフ界の名誉をかけ万全の態勢で選手権の開催に取り組んだ。結果は5年前のカナダカップをしのぐ成功で、世界に向けてゴルフ日本の信用が高まった。

この成功を後世に伝えたいと、当時役員を歴任した方々が『わかな会』という会を作り思い出の川奈を舞台に定期的にゴルフ大会を開いていた。

メンバーは石井、野村両氏を筆頭にアマチュアの三好徳行さん、女子ゴルフの大御所、阿座上秋子さん、帝国ホテルの犬丸一郎さん、ビクターの社長を務めた岡正五さんら。

会は定期的に行われていたが、時代の流れとともに一人去り、二人去りで開かれなくなってから久しい。世界アマチュア・チーム選手権はオリンピックの精神を踏襲し、ゴルフ競技を通して世界の若者が手を結び、平和を守ろうとするところに狙いがある。

ところが、いま世界のゴルフは、プロ全盛期である。すべてプロ志向が強いことからアマチュアの精神を論じる機会がなくなっている。手持ちのバッジを交換したり、ユニフォームを交換したりの交流の習慣を忘れ去っている。『わかな会』はそんな風習を後世に語り継ぎたいというところに狙いがあったようだ。

《写真》

わかな会のメンバー



伊豆伊東のゴルフ物語

(64) 大倉男への感謝会 ～日本ゴルフアース倶楽部 主催で盛大に

関東のゴルフを統括する競技団体に、関東ゴルフ連盟という組織がある。その前身は1933（昭和8）年創立の日本ゴルフアース倶楽部である。関東地区に誕生した8ゴルフ倶楽部を中心とした親睦団体で、本部を東京・丸の内の東京会館内に置いていた。

戦前に創設された関東の8倶楽部とは東京、霞ヶ関、我孫子、相模、武蔵野（戦時中に消滅）、程ヶ谷、藤沢（戦時中に消滅）、鷹之台の各倶楽部で、その会員たちが三々五々集まっては赤星兄弟を囲んで技術研修会を開いたりして会員同士の交流などゴルフの普及に熱心だった。

1934（昭和9）年の秋のこと。日本ゴルフアース倶楽部の主催で『大倉男の感謝する夕べ』が東京会館で開かれた。この夕べには日本ゴルフアース倶楽部の主だった会員百余人が出席して大倉男のゴルフに対する普及の情熱（ゴルフのメッカとなった川奈ゴルフ場の展開）に感謝の意を表した。

出席したのは日本のゴルフ界を代表して大谷光明（東京）、森村市左衛門（日本ゴルフ協会）、三輪善太郎（程ヶ谷）、藤田欣哉（霞ヶ関などの各氏で『大倉男の私財を投げ売るかのごとくゴルフ普及のためにゴルフ場造りに情熱を傾ける熱意にひたすら感謝以外にない』と大倉男の情熱に感謝の言葉を寄せた。

これに対して大倉男は『ゴルフ場造りは道楽ではない。東京近郊のゴルフ場では冬季間のゴルフは難しいでしょう。伊豆は暖かく、設計者のアリソンは、川奈は非常に景色もよく、外国にもめずらしい景色の良さがある、とほめている。地方の発展を考慮し、私は試験管に入った積りで取り組んでいる』と語った。大倉男の頭の中にはゴルフ場を成功させる以外に地方都市の発展という計算があったことを参加者たちは知ったようだ。

* 大倉男：大倉喜七郎男爵

《写真》

東京会館での感謝会、中央は挨拶する大倉氏



伊豆伊東のゴルフ物語

(65) 川奈会の誕生～大倉喜七郎のプロゴルフ支援がきっかけ

大倉男爵招待の関東プロゴルフ競技会という催しが開かれたのは1939（昭和14）年の2月22日のこと。参加したのは関東プロゴルフ協会の32人。絶好のゴルフ日和に恵まれ36ホールのストロークプレーで争われた。コースはアリソン設計の富士コース（6691ヤード・パー72）だった。富士コースはこの年の秋、日本プロゴルフ選手権の開催が予定されていて、コースが完成して初めてのプロ競技となった。

競技（36ホールストロークプレー、当時はメダルプレートといった）はホームコースになる村上義一（川奈）が午前中のプレーで76をマークしてトップに立ち、これに78の林萬福（東京）と川奈出身の内田義男（奉天）が続いた。

スタートの遅かった内田は午後のラウンドの17番でトップを走る林を1打しのぐ好調なプレーを続け、18番をパーで切り抜ければ優勝という場面だった。ところが2打目がホール右側の立ち木に当たり、3打でグリーンに乗せたものの3パットの6となりトップの林に1打離されて通算155。結局、林が154打で逃げ切った。3位は浅見緑蔵（程ヶ谷）と陳清水（武蔵野）が分け合い、午前中トップの村上は160で5位タイとなった。

優勝した林は台湾出身のプロで、東京ゴルフ倶楽部の朝霞に在籍していたが、戦後、母国台湾に引き上げた。日本滞在中は日本オープン、日本プロなどの大きな競技に勝っている。

この招待競技に参加した32人のプロの中から最近のゴルファーに馴染み深いのは、井上清次（相模）、山本増二郎（川奈出身・我孫子）、孫士均（日本に帰化して小野光一・程ヶ谷）、安田幸吉（東京）、向井周吉（我孫子）、島田二郎（程ヶ谷）、中村寅吉（程ヶ谷）、鈴木源次郎（程ヶ谷）、山口宏（川奈）らだが、中村寅吉は新人プロでまだ10歳台の若者だった。



《写真》

大倉招待プロゴルフ競技の一コマ

伊豆伊東のゴルフ物語

(66) 川奈のプロたちの武者修行～ 東京G Cで修業した山本、内田ら

日本のプロゴルファーの発祥は東京ゴルフ倶楽部の駒沢コースである。アメリカ留学中にゴルフを身に着けた赤星六郎は帰国後、東京ゴルフ倶楽部に入会した。帰国する前年にはパインハーストの大会で優勝し、アメリカのゴルフ界では“東洋の新しいスター誕生”と大騒ぎされたことがある。当時、日本ではアメリカでの出来事についての情報が乏しく、赤星が帰国してアマチュアゴルファーの快挙と知った次第だ。

東京ゴルフ倶楽部に入会した赤星は、ゴルフの普及に奔走した。『ゴルフの普及にはプロの存在は不可欠』とプロの育成に汗を流した。白羽の矢が立ったのは安田幸吉で、プロになるべく赤星の指導が始まった。安田は世田谷・深沢の尋常高等小学校を卒業し、お行儀見習いを兼ねてゴルフでキャディをやっていた。赤星は素直な安田少年にプロとしての心得やプロの在り方を指導した。

東京G Cは1932（昭和7）年に埼玉県朝霞に移転し、これをきっかけに優秀な少年キャディ25人を募集したが、同時に川奈出身のプロを迎え入れた。

山本増二郎と内田義男の二人で、アリソン設計の名コースでの修行に入った。ともに川奈でそれなりの活動はしていたが、東京ゴルフ倶楽部の会員だった大倉喜七郎の配慮と思われる。

山本は修行後、1930（昭和5）年に新設された我孫子G Cにプロとして迎えられ、林由郎という戦後、華々しい活躍をしたプロを育てた。その時の逸話でこんな話がある。元来、まじめ人間で知られる山本は、弟子の林が師匠より遅れて出勤すると『林！バッグを持ってこい』と大声で一喝するや林のバッグをハウス裏の田んぼに放り投げた。作法に厳しいプロだった。

《写真》

東京G Cの新人キャディーに交じって修行中の山本増二郎（前列左端）と前列右から4人目が内田義男



伊豆伊東のゴルフ物語

(67) 川奈出身、村上義一のコース設計 ～相模原西コースは会心の作

川奈ゴルフ出身のプロゴルファーの中には、コース設計の分野で一流と折り紙をつけられたプロが何人かいる。その一人の村上義一の足跡を辿ってみたい。村上是1913（大正2）年、山本増二郎や石井茂と同じく静岡県の生まれで1928（昭和3）年ごろからゴルフ界にご縁ができ、その時代から終戦の年まで川奈ホテルに勤務した。その後、在日米軍専用になった山中湖ゴルフ場の復旧工事に関係し、熱海のゴルフコースにもご縁があった。

その後、米軍の根岸（横浜）のゴルフ場を経て相模原ゴルフクラブ（GC）の専属になった。

村상을相模原GCに誘ったのは同ゴルフ場のオーナーだった小寺西二で、村上が戦後、ゴルフ場の普及工事や再建工事を経験しているところに着目した。相模原GCは1954（昭和29）年ごろからコース建設が始まり、村上是コース建設の中核を担った。

相模原GCは18ホール（現在の東コース）で開場し「新相模」のゴルフ場と呼ばれていた。それは、コース名に相模という同じ文言が入っていた1930（昭和6）年開場の相模カンツリークラブ（CC）があり、一步先輩の「相模」に対して「新」という文字をつけて、混同を避けようとしたためだった。

村上はその後、コースの復旧工事や改修工事で身に着けた経験を生かし、岐阜県下の愛岐カントリークラブ、日本ラインゴルフ倶楽部を手掛け、静岡県下では愛鷹シックスハンドレッドクラブなどを完成させ、設計家としての地位を確立している。

相模原時代は西コースの18ホールを手掛けた。戦略的に「好評で東コースをしのぐ評価を得ている。

《写真》

相模原GCの西コース（ゴルフダイジェスト社提供）



伊豆伊東のゴルフ物語

(68) 村上のプロ育成 ～石井裕士と佐々木マサ子

村上義一は相模原ゴルフクラブ（G C）に移って以来、通常のプロの業務と並行して若いプロの育成に力を注いだ。川奈に縁の深い石井裕士（弘）がその代表格だろう。体格に恵まれ、パワーがあり、よく飛ばした。村上は『ヒロシは期待している若者です』と懇意な仲間に紹介していた。

石井は一見不愛想だが、人柄はよかった。1960（昭和35）年にプロ入り。当初はなかなか芽が出なかったが、村上の紹介で愛岐カントリークラブに移ってからパワーゴルフの本領を発揮し、日本プロ、中部オープンなどに優勝している。ところが不幸にも65歳の若さで癌に侵され他界した。

同じころ、相模原G Cでは佐々木マサ子という女子プロが育った。日本人離れした容貌の持ち主で体格もよかった。168センチの長身だった。岩手県の出身で運動神経がよく、将来を嘱望されていた。相模原から三重県の日土市に移った後、運動具メーカー、ミズノの専属になった。1972（昭和47）年の日本女子オープンに優勝し、常勝樋口久子を抑えたことが高く評価された。

佐々木は樋口、佐々木のコンビでアメリカの女子ツアーに参加して各地を転戦している。樋口は転戦中、U S女子プロ選手権に優勝してゴルフ界の話題になった。相模原G Cでは男子プロでは石井裕士以下、原芳将他、若いプロが多数育った。石井は中部オープンに2度優勝の記録がある。原には特筆すべき記録はないが、後輩の面倒をよく見た。村上亡き後、神奈川県下のこの地区のプロの組織的な活動や組織の強化に力を入れていた。村上は78歳で他界したが、その葬儀は倶楽部の練習場で行われた。プロの葬儀を倶楽部が関わるのは稀だが、相模原G Cが村上に向けた感謝の意あったろう。



《写真》
佐々木マサ子

伊豆伊東のゴルフ物語

(69) 増さんのコース設計と ゴルフ場運営

川奈出身の山本増二郎は知り合いのゴルフ仲間やゴルフ倶楽部のメンバーたちから『増さん』の愛称で親しまれた。長年勤めた我孫子ゴルフ倶楽部（GC）を後に、乞われて埼玉県狭山ゴルフ・クラブ（GC）の所属になり、オーナーの小寺西二を支えた。山本のゴルフ界とのご縁は昭和元年に遡る。山本は当初、川奈ホテルの建設事務所に勤務していた。ホテルのゴルフ場がゴルフの専門家を必要としたことから2年後、東京ゴルフ倶楽部の駒沢コースに出向き、ゴルフ履修のために安田幸吉の指導を受けた。ここで5年間修行し、1931（昭和6）年に我孫子GCの創設とともに正式にプロとして迎えられた。

プロとしての競技成績は特筆するものはないが、関東プロ協会の月例などで数多く優勝の経験もある。

増さんのことで忘れられないのは、彼が関東プロゴルフ協会の会長時分、会長としてマスターズトーナメントに招かれた時のこと。謹厳実直な増さんは、英文のメッセージを携え現地に乗り込んだ。マスターズの委員会主催の歓迎パーティーで英文のメッセージにカタカナのルビをふり、たどたどしい英語のメッセージを読み上げ、やんやの拍手、喝采を浴びたことがある。

何事にも挑戦するのが増さんの身上だが、カタカナでルビをふった山本流英文発音のメッセージは、果たして何人が理解してくれただろうか。

また、増さんの業績として故郷の静岡県伊東市萩に18ホールのコースを設計（伊東カントリークラブ）したことは、増さんの長いゴルフ生活の証だろう。同クラブは今季、1934（昭和9）年創始の関東クラブ対抗競技に静岡県を代表して初出場した。結果は出場49チーム中、19位という好成績を収めたのは特筆ものだ。

《写真》

元気な頃の増さん（右から2人）





(70) 強打者、杉本英世のプロデビュー ～師匠の教えを守り通した運動靴 のプレー

川奈から出たプロゴルファーの中で、異色の大物といえば杉本英世を挙げたい。家業は漁師だった。幼少期から海に馴染んでいたが、高校時代、川奈のゴルフ場でキャディーのアルバイトをやったのがゴルフ界とのご縁の始まりだった。

体力的にも恵まれ、伊東の高校時代にはスポーツ万能で走ってよし、柔道は黒帯というスポーツ少年だった。

高校を卒業して川奈ホテルに就職し、ホテルマンを目指す一方ゴルフのプロも視野に入れて修業した。

高校時代の杉本にこんなエピソードがある。
手掛けたソフトボールで100メートル近くぶっ飛ばすパワーの持ち主で、このパワーに着目したのはプロ野球、毎日オリオンズの監督をしていた別当薫さんで、打者としてスカウトに乗り出そうとしたことがある。当時、別当さんは『あの体力だけでも魅力がある。守備は兎も角、代打者で使えそう』と語ってくれたことがある。

しかし、杉本はゴルフに魅力を感じていたらしく、石井茂の教えを乞うようになり、ゴルフのプロを目指した。

関東のプロ組織（関東プロゴルフ協会）は、プロを目指す研修生を対象に、現役プロの月例競技と並行して競技会を開いていた。

そこに登場した杉本は、なんとスパイクならぬ運動靴を履いて登場していた。尋ねると杉本は『先生（石井茂）から、プロになるまでラウンドはズックを履いてやれ』といわれたそう。師匠の石井に尋ねてみたら『芝の上では、ズックは滑るでしょう。滑らないためには足で踏ん張るしかない。これが足腰の鍛錬になるのです』杉本は師匠の教えを守り、プロ合格まで運動靴でのプレーを続けた。

《写真》

1964年の日本オープンを制した時の杉本、東京GCで



伊豆伊東のゴルフ物語

(71) 大倉喜七郎の夢 ～冬は川奈、夏は天城高原

日本ゴルフ協会に加盟しているゴルフ場の数は、土地の広い北海道が一番多く、静岡県下の加盟クラブは53クラブを数える。その静岡県下の伊豆半島の伊東には、川奈のゴルフコース（36ホール）を筆頭に、3コースもある。伊豆半島に点在するゴルフ場は、気候よし、食べ物がうまく、ゴルフ天国といえるだろう。冬場は暖かいし、湧き出る温泉の質は良好この上なしだ。これに対して関東平野に点在する各ゴルフ場は、温暖化傾向が強いご時世ながらも冬場は寒い。

そこを見越した大倉喜七郎は、夏場は涼しい天城高原にゴルフ場の建設に踏み切った。コースの設計はその道の第一人者といわれる井上誠一に託した。井上は東京・お茶の水にある井上眼科にご縁があり、若い頃は埼玉県霞ヶ関カンツリー倶楽部の会員として倶楽部競技はもとより関東のクラブ対抗競技などで活躍した。ところが結核に侵され、伊東での療養生活を余儀なくされた。健康管理の上でゴルフプレーが無理と知るや好きなゴルフのコース設計の道に入った。

余談だが、井上はアメリカへコース設計勉強のために海を渡ったが、これを大倉が支えている。井上が設計した大洗ゴルフ倶楽部は1953(昭和28)年の開場で、日本オープン、日本プロ選手権の舞台になったコースだ。

伊東のゴルフ場を代表するような存在の天城高原ゴルフコースは、全面ベント芝のコースで夏場は涼しいのが特色だ。『夏の軽井沢を思い出す』(暖香園・北岡貴人氏)というほど、夏のムシムシする暑さを忘れさせてくれる快適環境下にあるコースだ。川奈と天城高原の二か所のゴルフ場は、大倉が地域開発を念頭に置いて手掛けたゴルフコースだ。関東地区では味わえない良さがあり、ゴルファーなら一度は行ってみたい名コースといえよう。



《写真》

(上) 川奈ホテル

(下) コース設計家井上誠一（左端）～大洗の設計打合せ



(72) バーターンダーからプロゴルファーへ ～関東プロ協会長を務めた森田吉平

関東プロゴルフ協会の会長（１９８７年から１９９２年）を務めた森田吉平は、川奈ホテルの従業員（バーテンダー）からプロゴルファーに転身した軽歴の持ち主だ。川奈には他にも同様にホテルの従業員からプロゴルフに転向組はいる。森田は若い頃、コースが一望できるバーでシェーカーを振っていた。１９番ホールというそうだが、今も多くのゴルファーが立ち寄る。

プロの道を選んだ森田は、伊東から南〇〇キロ離れた伊豆大島のゴルフ場に勤務していた。大島ゴルフ場（小涌園）のキャディーは、あんな姿でバッグを担いでくれるのが有名だった。

昭和３０年代半ばのことだが、大島を訪れる機会に恵まれた。東京の竹芝桟橋から客船に乗り、一昼夜かけて岡田港に上陸し、大島のコースでプレーした。同行したのはプロ野球の監督をした別当薫さん、野球評論家として活躍した大島信雄さんだった。

客船は竹芝桟橋を出港すると東京湾の沖合に停泊し、翌朝早く入港するのんびりした船旅だった。いまはジェット高速船で１時間余り。時代は変わった。

さて、その時分、森田は専属プロとして、もっぱら自分の腕を磨いた。その時代、関東プロ協会主催の月例競技にはその都度、大島から足を運んでいたが、謹厳な真面目プロという印象が残る。

その後、山梨県にある富士ロイヤルというゴルフ場に移り、キャディーの育成や、コース管理、若いプロ育成に手腕を発揮したが、経営の面で厳しい環境の変化に苦悩した。

その後、山梨時代の熟練した手腕が買われて関東プロゴルフ協会の会長につき、先輩プロとは一味違う森田時代を築いた。森田の精神が今日の日本プロゴルフ協会に繋がっているようだ。

《写真》
森田吉平



伊豆伊東のゴルフ物語

(73) プロたちのOB会 ～川奈は総勢40人を超える大世帯

プロゴルファーたちには、それぞれが育ったゴルフ場やプロへの道を歩いてきた時代の人間関係を確かなものにすべく、OB会という組織がある。戦前に創設されたゴルフ倶楽部に多い。古くは川奈ホテルのゴルフ場を本拠とする川奈会（現会長・杉本国明）がある。総勢40人を超える。ついで東京駒沢会（会長・川井隆）は30人の大世帯だ。

川奈会は戦前の発足で、オーナーの大倉喜七郎が久美子夫人とともに盆と正月にプロや従業員に心づけを渡していたのが発端らしい。その大倉夫妻の志を、所属プロだった村上義一が、親睦ゴルフ大会の賞に当てた。これが川奈会のプロたちに与えられる賞金の発端といわれる。

当初の目的は従業員の慰労会だったようだが、夏場になると海水浴、釣りなどを楽しむ一般客がこれに加わり、にぎやかな会になった。

戦時中は男子プロの多くが兵役に服したために人数が減り、一時休会に追い込まれたが、1952（昭和27）年ごろに復活し、競技本位の会に様変わりしたらしい。

川奈から地方（広野GC）へ移籍した石井哲雄（広野）らは、お里帰りの際には川奈会に参加して健在ぶりを発揮していたが、こんな快挙がある。ある時の川奈会で、難攻不落の富士コースをコースレコードに匹敵する64（32・32）で回っている。川奈会では大叩きすると罰金を科せられ、ゴルフ場の補助と合わせ、会の運営費に充当しながら、延々と続いている。

《写真》

石井一族の代表格・石井迪夫（左端）～1956年のカナダカップで林由郎と組んで団体4位タイの好成績を出した



伊豆伊東のゴルフ物語

(74) 競技で脚光を浴びた ～石井一族のゴルフ

数多い川奈出身のプロの中で、競技面で目立つ活躍をしたプロにスポットを当ててみた。長老プロは村上義一（相模原＝故人）だが、その後輩は実に人材が豊富だ。中でも石井一族といわれる石井姓のプロの活躍は注目に値する。競技面のみならず、ゴルフ場の運営面でも経験や知識を生かしてゴルフの普及に貢献している。

川奈のプロで注目されるのは富戸の出身者だ。川奈港のすぐ南に位置する集落で、漁業に縁が深い。戦前のことだが、ここの若者たちの何人かは義務教育を終えると川奈のゴルフ場でキャディーとして働きに出ている。やがてプロゴルフへの道が開けて活躍の場を見出した。

石井姓のプロは治作（京都）を筆頭に茂（紫）、哲雄（広野）、廸夫（芦屋）、利宮（芦屋）、朝夫（府中）、弘（相模原）らがいる。その中でも競技面で目立つのは石井茂、石井朝夫だろう。茂は1936（昭和11）年に川奈のキャディーに。その後、広野に移ったが、不幸にも交通事故に遭遇して一時的ながらゴルフから離れていた。だが、戦後、熱海GCで復帰し、1952（昭和27）年には、川奈に戻っている。1942（昭和17）年、関西プロのメダリスト。この頃から故障も癒え、力を発揮するようになった。

1954（昭和29）年には待望の日本プロを制してトップクラスのプロに躍り出た。1歳年下の朝夫は1942（昭和17）年、川奈入りがプロの出発点。戦後、他クラブに移籍して競技に出ていたが、なかなか勝てず、“万年2位の石井”ともいわれた。しかし、1963（昭和38）年代には関東オープンやアジアサーキットに勝って一流の折り紙をつけられた。若い世代には内田繁がいる。中部オープンの勝者で、ニックネームはシー坊。川奈から転出組の一人だが礼儀正しいプロだった。

《写真》

昭和29年、日本プロゴルフ選手権を制した石井茂
（手前はやぶれた孫士均＝小野光一、広野GCで）



伊豆伊東のゴルフ物語

(75) 川奈ゴルフ出身のプロたち ～コース設計、競技、レッスン で大活躍

川奈から育ったプロは多士済々だ。トーナメントで活躍したプロ、ゴルフ場に所属して運営に貢献したプロなど、他倶楽部に見られない多彩な人材を送り出している。

川奈会に名を連ねている川奈育ちのプロたちの足跡を追ってみると、1960(昭和35)年代に開かれた際、川奈会のメンバーは40人を超える大世帯だったのが特筆される。

古い時代からのプロを探してみると、
村上義一(相模原GC) 陳清水(芙蓉CC) 内田義男(千葉PG) 山本増二郎(我孫子GC)
石井治作(京都GC) 石井茂(紫CC) 石井哲雄(広野GC) 山口宏(富士GC) 池田宏
(キャンブドレーク) 勝俣利孝(平塚CC) 山口春夫(厚木CC) 杉本三義(根岸GC)
村上貞吉(サザンクロスCC) 森田吉平(多摩川練習場)といったメンバーたちでオール
タイマーには懐かしい名前が浮かんでくる。

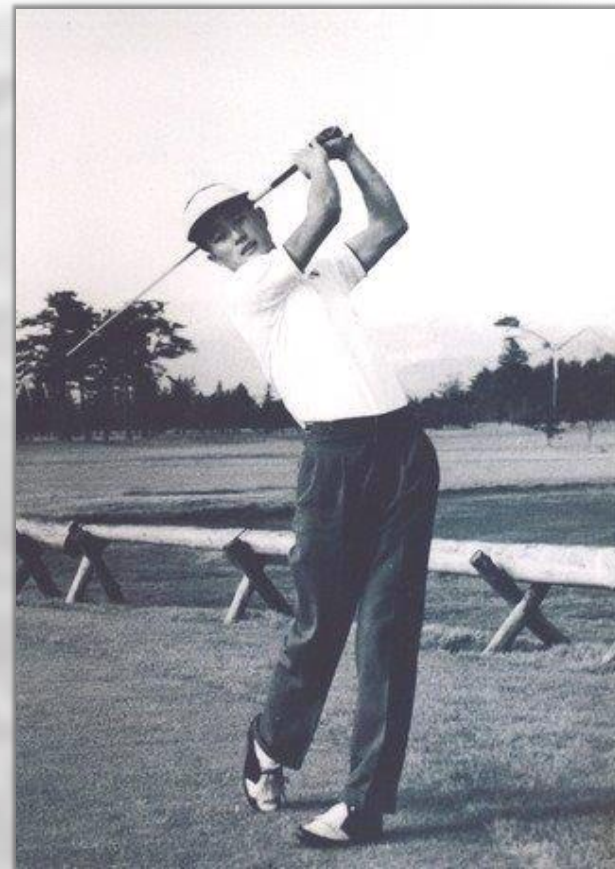
川奈会の長老、村上義一が相模原で育てたプロは、石井弘、原芳将、山田悌次郎、稲葉豊に
女子プロの佐々木マサ子らがいる。

川奈会メンバーのうち福西延洋は八王子GCから長崎CCに移籍し、長崎在住のゴルファー
たちから信頼されていた。山本嘉夫(桑名CC)は名古屋の名古屋GCとご縁が深く、こ
こからプロになっている。

印象に残っているのは鑑田茂だ。相模CCからプロ入りし、1961(昭和46)年、富山
の呉羽CCに移った。プロになりたての1959(昭和34)年、日本オープン(相模原GC)
の第1日を69(5アンダーパー)でトップに立って『新人ながら…』と大きな話題になった。
終局的には3位に入賞したが、その前年にプロになったばかりだった。
しかし不幸にも平成28年の秋、78歳の若さで他界した。

《写真》

1959年の日本オープン第1日で新人ながらトップに立った時の鑑田茂



伊豆伊東のゴルフ物語

(76) 川奈コースの微妙な起伏が若いプロに技術を伝授した

伊東の川奈ホテルゴルフコースの設計者は大谷光明と英国人のチャールズ・アリソンである。

今日のゴルフ場建設は機械力をフルに活用するので、大きな起伏も、アッという間に平坦になってしまう。文明の利器の恩恵だ。しかし戦前のゴルフ場建設は機械力に頼ることなく人的な労力で作業が進められていた。そこには機械力工事には見られない微妙なコース表面の変化が残り、この起伏がプレーに影響した。

こうしたフェアウェー表面の微妙な変化に敏感だったのは川奈育ちのプロでは石井富士夫と内田繁だろう。

石井は満20歳前にプロの資格を取得している。川奈から府中CCに乞われて移籍し、昭和40年に24歳の若さで関東プロを制している。移籍先のゴルフクラブでは料理家の田村魚菜さんが生徒で、ご子息の『府中くん』の名づけ親だったそうでこれが自慢の種だった。

川奈育ちのプロには石井、内田性が多いが、内田姓の代表的な名手には内田繁がいる。石井と同様に川奈で学んだ繊細な技を発揮して1970（昭和45年）代の中部オープンに三度の優勝経験があり、広野出身の橘田規、相模原出身の石井裕士らと中京地区プロゴルフ界の牽引役を担っていた。ニックネームは本名が繁であることから“しー坊”。多くのゴルファーに親しまれた。現役を退き、現在横浜に在住で、ご子息は日本航空のパイロットだそうだ。両者は川奈育ちのプロらしく礼儀作法に厳しく、川奈で身に着けた多彩な技術を駆使して多くの先輩に劣らぬ活躍をした。



石井富士夫プロ

《写真》

川奈出身プロの代表的な存在・石井富士夫（川奈ホテル背景）

伊豆伊東のゴルフ物語

(77) 普及に情熱を燃やした 伊東のゴルファーたち

日本プロゴルフ殿堂（松井功・理事長）では毎年、ゴルフ界発展に貢献したプロゴルファーを顕彰しているが、2019年度の男子プロは佐藤精一（元我孫子GC）が顕彰された。先般、その佐藤に心境を聞く機会があった。

佐藤は1966（昭和41）年に袖ヶ浦CCで日本オープンを制したのを始め、数々のシニア競技にも勝っている。我孫子GCでは山本増二郎、林由郎に指導を受けて成長しているが、テンポの速いスウィングの持ち主で『早打ちマック』というニックネームをつけられていた。

現在は茨城県の水海道のゴルフ場で引退後のゴルフを楽しんでいるが、現役時代に記憶に残るできごとは『川奈ゴルフでのプロ月例競技に出場する際、前泊の暖香園で受けたもてなしです』と数十年前の記憶を辿りながら、淡々と語った。

『私は我孫子GCに入れてもらい、最初からプロになろうとは思っても寄らないことでした。ところが先輩プロの手引きでその道が開け、指導してくださったのは山本さん。川奈出身の方で、作法、技術の面は厳しかった。会員だった北岡さん（暖香園先代社長・文人氏）には物心両面からお世話になりました。腹一杯食わせてもらいました』

例年、春になると関東プロゴルフ協会主催の月例競技が川奈ゴルフで行われ、佐藤は林由郎らに連れられて伊東を訪れて競技会に出た。といっても現在の会社員の出張とは違い、諸経費は自分払い。先輩プロに費用負担をしてもらっていた。佐藤のような謹厳辞直な性格の持ち主は倶楽部会員である篤志家の支援を受けた。殿堂入り表彰の場で『伊東でお世話になったことはいまでも忘れられないよ』佐藤はこの言葉を繰り返していた。



《写真》

水海道のゴルフ場で伊東での思い出を語る佐藤精一

伊豆伊東のゴルフ物語

(78) 中国にゴルフ場を建設した 伊豆高原在住の原幸男氏

伊豆高原在住の原幸男さんは、中国にゴルフ場を造ったゴルファーである。もともとゴルフ場にご縁があったことから中国側の要請を受けて建設に動いた。

今日の中国はゴルフには縁遠いが、古くは日本が旧満州における諸事業を拡大した時代に、日本のゴルファーたちが普及に動いた。満州ゴルフ連盟を創設し、競技会を開催するなどの活動記録が残っている。

原さんが関わったゴルフ場は北京市（順義区）に近い18ホールの平坦な林間コースで、日本パンアジアコーポレーションと中国国際体育旅游公司の共同事業として建設されたゴルフ場で、李鵬、朱鎔基といった中国政府の要人が名誉会員として名を連ねていた。

ここを訪ねたのは1994（平成6）年の初秋。付き添ってくれたキャディーさんは白いスカーフを被り、日本式の服装で日本式のお辞儀で迎えてくれた。彼女たちが喋る言葉を除けば、日本のゴルフ場の雰囲気だった。利用客は北京に駐在する日本企業のビジネスが多かったことから、日本のゴルフ場に似た雰囲気があった。経営のトップ原さんが日本から持ち込んだムードだったろうか。

開場は1987（昭和62）年5月。90（平成2）年にはアジア競技大会のゴルフ会場となり、日本は丸山茂樹が金メダルを獲得している。中国は習政権以来、ゴルフには厳しいが、ゴルフ愛好家の南さんは『中国もゴルフは盛んになり、習さんがトランプ大統領と親善ゴルフをやれば貿易摩擦が消えないだろうか』と中国におけるゴルフの普及を心待ちだ。



《写真》

北京ゴルフ倶楽部のコースと最近の原さん

伊豆伊東のゴルフ物語

(79) 上げば尊しゴルフの恩 ～伊東商高の斎藤元謙教諭

県立伊東商業高校のゴルフ部といえば、高校ゴルフ界の強豪校として知られていた。同校の創立は1963（昭和38）年。小塚誠一初代校長がプロとして活躍した杉本英世の恩師だった関係から「人間育成にはゴルフが一番」と、開校と同時にゴルフ部を誕生させ、部長に就任したのが斎藤元謙教諭だった。「生徒に教えるためには自分でも実際にやらなければ…」と早速、なけなしの大金をはたいて地元のゴルフクラブに入会して本格的にゴルフと取り組んだ。

その結果、ハンディキャップ8まで腕を上げた。「技術的に迷いが出るとプロたちによく相談した」とのこと、その相談役が前出の杉本であり、内田繁、石井富士夫という川奈ホテル・ゴルフコース出身のプロだった。

斎藤教諭が育てたプロは十数人いるが、先生がいうに「高校体育の本筋はプロの養成機関ではない。でも商業高校であるため生徒の多くは就職希望。だから素養のある生徒にはプロへの問題を親代わりになって考えた』と語っていた。

近年、ゴルフに取り組む若者の親の中には、むやみやたらとプロに育てようとする流れが見られるが、子どもの将来を思っていることだろうか。疑問を感じることもある。

伊東商業高出のプロに、静岡オープン優勝経験がある坂下定夫がいる。坂下は「マナー、忍耐、根性の三原則をみっちり仕込まれました。これを破るとたちまち拳骨。でも斎藤先生は血の通った、いいおやじでした」と話している。

斎藤イズムは、ゴルフ場がたくさんある伊東の土地柄のたまものなのだろうか。

＝文中敬称略

《写真》

校庭で生徒を指導する斎藤教諭





(80) ゴルフ王国静岡県の伊東 ～多くの作家が愛した川奈

2018年6月にスタートしたこのシリーズは、回を重ねて80回を数えた。表題の『伊東』は東京の奥座敷ともいわれ毎年、多くのゴルファーが訪れる。いわば日本のゴルフのメッカだ。日本ゴルフ協会から刊行される年鑑によると、同協会に加盟しているゴルフクラブ数は土地の広い北海道が一番多い。次いで兵庫県。静岡県の加盟クラブ数は53クラブを数える。ゴルフ場の数では関東の周辺には及ばない。だが、温泉につかってのんびりゴルフとなると伊東が一番という声が高い。冬は暖かく、夏涼しく、いいコースが沢山あるのがゴルフ王国といわれる由縁だろう。

この伊東を好んで訪れたのは昭和の時代に活躍した多くの文芸作家たちだ。その集いは青薔会、PGAの二グループがあった。川奈の常連は杉村楚人冠、加藤武雄、細田民樹、佐々木茂索、伊藤正徳、下村海南、久米正雄、鈴木文史郎、鶴見祐輔、邦枝完二というメンバーたちがオーナーの大倉喜七郎を囲んでコースを回った。戦前、小説家として活躍した邦枝完二は、プレーした日の川奈の秋を『川奈の小春日』と、題してこんな文で纏めている。

『松林を越えた大島の煙をバックにした姿は、ミレーの絵のように美しい。なんと晴れ晴れした天気なのであろう。風もなく雲もなく、伊豆七島は指呼の間に浮いていて、これがその昔、伊豆を逃げ回った頼朝が見たとの同じ景色であるのさえ、不思議なくらいの小春日和だ。スパイクは嬉々として芝を踏んだ』

その芝こそ、ゴルフ王国の象徴と言えるだろう。また、その芝は多くのゴルファーに技術を教えてきた。日本オープンや世界のアマチュアの最高峰、世界アマ・チーム選手権の舞台にもなった。いつまでも日本のメッカであってほしい。半年間、ご高覧有難うございました。

《写真》

(上) 遠く大島を望む川奈コースでプレーに興じる文士ゴルファーの皆さん

(下) 邦枝完二の随筆につけられた近藤浩一郎・画の大倉男爵のゴルフスイング二態

